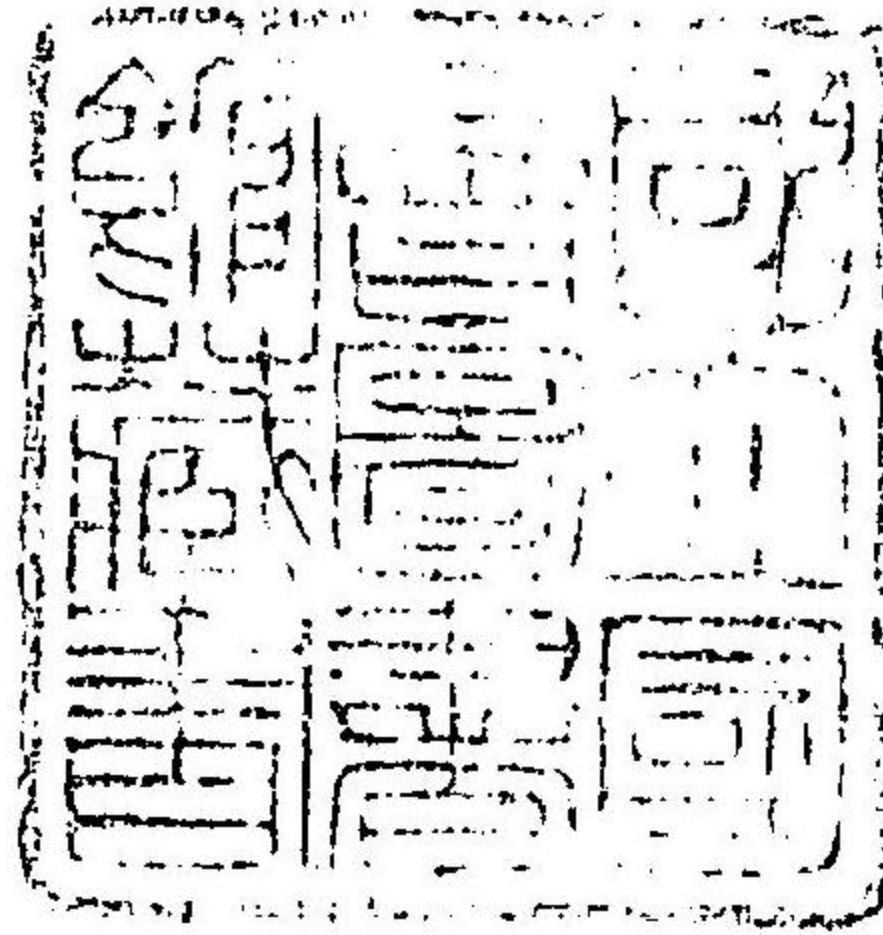


心中天の網島
心中宵庚申

近形門左衛門作
武蔵屋茶版

9124 T 23827



たろき

337104

紙屋 治兵衛
紀伊國屋 小春

天竺網島

近松門左衛門作

さん上はつらふんころのつころちよころふんころで。まてとつころわつらもつくる
 くく。誰が笠とわんがらぬがらす。空がくんぐるくも。れんげくればつらふん
 ころ。妓が情の底深さこれのや戀の大海と替へも干されぬ岬川。思ひく思ひ頃。心が
 心留むるは門行燈の文字が席。浮れ忽行の仇浄瑠璃。役者真似な唄。二階座敷の三
 味線に曳れて立よる客も有。紋日通れて顔隠し仕過しせじと忍び風。仲居のさよが是と見
 て三保の谷が着たりける。頭巾の鍔と取外しく。二三度延たれ共思ふ煙客なれば遁さ
 じと。飛懸り渾り悪洒落。ごんせと止たる女景清鍔と頭巾。ついふみ冠る客も有。橋の名
 さへも梅櫻花と揃へし其中に。南の風呂の浴衣より今此新地に戀衣。紀の國やの小春とは
 此十月に仇し名と世に遣せとの兆のや。今宵は誰の呼子鳥。覺束なくも行燈の影も違ふ
 妓の立歸。ヤ小春様の何とどの互ひに一坐も打絶。貴面ならねば便も聞ず。氣色がわるい
 ろ顔も細り寝れさんした。誰やらが咄して聞は紙治様もへ。内ら敷度客の吟味に遇んし

天の網島

て。何處へもむぎと送らぬの。いや太兵衛様に請出され。在所とやら伊丹とやらへ往らんとすはづ共聞及ぶ。何様で御坐りやすと言ければ。ア、もう伊丹と云ふて下んすな。夫で痛入はいな。最惜なげに紙治様と私しが中。左程にもある事と。あの誇口の太兵衛が淫名と立て云散し。客といふ客は退果。内からは紙屋治兵衛故じやとせく程に。文の便も叶はぬやうに成やした。不思議に今宵は武士衆とて河庄方へ送らるゝが。斯往く道でも若し太兵衛めに逢ふると。氣遣さく敵持同前の身持。なんと其邊に見へぬのへ。チ、夫ならちやつと外さんせ。あれ一丁目のらなまいた坊主が。悪戯念佛申て來る其見物の中に。のんこに髪結て野良らしい。伊達衆自慢と云そな男。慥に太兵衛様と見た。あれく爰へと。云ふ間程なく炮礮頭巾の青道心。墨の衣の環褌見物ぞめきに取巻れ。鉦の拍子も出合とん。ほでてんく念佛に仏口嚙交て。樊噲流は珍らしうらす。門と破るは日本の朝比奈流と見よやとて。貫木逆茂木引破り右龍虎左龍虎討取て。難なく過る月日の關や。なまみだなまいたく。迷ひ行共松山に似たる人なき浮世ぞと。泣つてくワハく。笑ふつ狂亂の身の果何と淺猿やと。芝と褥に伏けるは眼も當られぬ

風情。なまみだなまいたく。糸く。細屋の徳兵衛。房に原來濃染込の。内の身代灰汁でもはげす。なまみだなまいたく。ア、是坊様なんぞ。エ、忌々しい漸々此頃此廓の心中沙汰が鎮つたに。夫れいて國姓爺の道行念佛が所望じやと。杉が袖らら報謝の錢。たつた一錢二錢で三千餘里と隔てたる。大明國への長旅は。おはぬだ佛わぬだく。ぶつく云ふて行過る。人立紛れにちよく走つ、と河内屋に駈込は。是はく早いお出お名さへ久しう云なんだ。やれ珍らしい小春様くは。るくで小春様と主の花車が勇む聲。是門へ聞へる高い聲して小春く云ふて下んすな表に否な李韜天が居るわいの。密のく頼みやすと云ふも洩てやぬつと入たる三人連。小春どの李韜天とはない名と付て被下た。先禮ら云まじよ。連衆内く咄した心中よし。意氣方よし床よしの小春どの。願て此男が女房に持の。紙屋治兵衛が請出する。張合の女郎近付に成て置やと破屋よれば。エイ聞共ない得知れぬ人の仇名立。手柄にならば精出して云はんせ。此小春は聞共ないといつと退けば又摺寄。聞共なく共小判の響で聞せて見せう。貴さまもよい因果じや。天満大坂三郷に男も多いに。紙屋の治兵衛二人の子の親。女

房は徒弟同士姑は伯母鐙。六十日ノ間に問屋の仕切にさへ廻る、商賣十貫目近い金出して請出すの根曳のとり。蟻螂が斧で御座る我ら女房子なければ。姑なし親もなし伯父持ず。身すがらの太兵衛と名をとつた男。色廓で潜上云ふ事は治兵衛奴には叶はね共。金持た斗は太兵衛が勝た。金の方で押たらばなふ連衆。何に勝ふも知れまい。今宵の客も治兵衛奴じや賞とく。此身すがらが貰ふた花車酒出しやく。エ何おしやんす今宵の客はお武士衆。押付見へましよお前は何處ぞ他で遊んで下さんせと。云共はたへた顔付にて。ハテ刀指の指ぬる武士も町人も客は客。何程指ても五本六本は指まいし。よふ指て刀脇差たつた二本。武士ぐるめに小春殿貰ふた。扱つ隠つ成れても縁有ばこそお出合申すなまいだ坊主のれ蔭。ア、念佛の功力有がたい。こちも念佛申すぞや鉦の火入煙管鑪木面白い。ちやんくちやくん。ゑい。紙屋の治兵衛小春狂ひが杉原紙で。一分小判紙塵々紙で。内の身代漉破紙の。鼻もなまれぬ。紙屑治兵衛。エなまみだ佛なまいだ。なまみだ佛なまいだ。と。暴亂留く門の口人目と忍ぶ夜の編笠。ハア、塵紙わせた。ハテさつゝい忍びやう。何故這入ぬ塵紙。太兵衛が念佛怖くば南無編笠も貰ふたぞ。引すり

入れたる姿と見れば。大小撰素だ武士の正良。編笠越にぐつと睨たる。眞丸眼玉は敲鉦念共佛共出ばこそ。ハア、と云共瘞まぬ顔。なふ小春殿此方は町人刃差いた事ななければ。己が所に澤山な新銀の光りに。少々の刀も捻曲めふと思ふ物。塵紙屋奴が漆漉程な薄元手で。此身すがらと張合ふの慮外千万。櫻橋のら中町下り忽行いたら。何處ぞでの紙屑疎離つてくりよ。皆おじやくと身振斗り男と磨く。町一ばらにはのつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に構はず堪る武士の客。紙屋くと善悪の噂小春が身に應へ。思ひ頼れ恍惚と無挨拶なる折節。内のら走つて紀伊國屋の。杉が氣疎顔付にて。只今春様送つて参りし時。お客様さだ見ぬすなせ見届けて來なんだと。酷う叱られ升慮外ながら一寸と。編笠押上面体吟味。ム、夫でないく氣遣なし。跡詰てしつぱりと小春様。したる樽の生醬油花車様さらば後に青菜の浸し物と。口合たらしく立歸る。至極堅出の武士大きに無興し。こりや何じや。人の面と目利するの身と茶入茶碗にするの。黽れに來申さぬ。此方の屋敷の晝さへ出入のたく。一夜の他出も留守居へ断り帳に付。六の敷錠なれ共お名聞て戀慕ふお女郎。何様ぞと一坐と願ひ。小春も連す先刻参つて宿と頼み。何でも一生の思ひ出お情

に預らふと存じたに。いゝな莞爾と笑顔も見せず。一言の挨拶もなく懷中で錢よじょうに扱々伏向て斗。首筋が痛の致さぬの何と花車殿茶屋へ来て産所の夜伽する事。竟にないづと監諒ば。ね道理々曰と御存じない故御不審の立はづ。此女郎に紙治様と申す深いお客がござんして。今日も紙治様明日も紙治様と。他うら手指もならず外のお客の嵐の木の葉ではらくく。登り詰てのお客にも女郎にもなて怪我の有物。第一勤めの妨とせくの何處しも親方のならひ。夫故のお客の吟味自然と小春様もお氣の淨ぬの道理。お客も道理くくの中取て。主の身なれば御機嫌よのれが道理の肝腎肝文。サアはつと香のけわさくわつさり頼升。小春様はる様と。云共何の返答も涙はるりの顔振上。あのお武士様同じ死ぬる道にも十夜の中に死んだ者の。佛に成と云ひ升が定のいな。夫と身が知る事。旦那坊主にお問なされ。眞に左様じゃ夫なら問たい事有自害すると首くゝるとい。必定此喉と切のたが澤山痛いでござんしよの。痛むの痛まぬの切て見す大方の事問いつしやれ。ア、小氣味の悪い女郎とやと。流石の武士もうて顔。エ、春様初對面のお客にわんまりな挨拶。些と氣と替りや此方良人尋て來て酒にせよと。立出る門の宵月の影傾ふさて雲

のあし人足薄く成にけり。天満に年ふる千早振る神にあらぬ。紙様と世の鱈口にのる斗。小春に深く大萩麻の腐り合たる御注連繩。今の結ぶの神無月。せられて逢れぬ身と成果。わのれ逢瀬の首尾あらば夫と二人が最期日と。名残の文の云のいし毎夜くの死覺悟。魂抜てとぼく忙々身と焦す。表賣屋で小春が沙汰武士客で河庄方と耳に入より。サア今宵と覗く格子の奥の間に。客の頭巾と願のいこく斗に聲聞へず。可愛や小春の燈に背向た顔のあの瘦れ事い。心の中の内皆己がこと爰に居ると吹込で。連て飛なら梅田の北野の。エ、知らせたい呼たいと。心で招く氣の前へ身空蟬の脱殻の。格子に抱付あせり泣。奥の客が大吟。思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も静な端の間へ出て行燈でも。見て氣と晴そふ。サアござれと連立出れば。南無三寶と。格子の小蔭に肩身とすぼめ隠れて聞共内にしらす。なふ小春殿背のらの素振詞の端に氣と付れば。花車が咄の紙治とやらと心中する心と見た違ふまい。死神付た耳へ異見も道理も入まじとと思へ共。去との愚痴のいたり先の男の無分別の恨す。一家一門其方と恨み憎しみ。万人に死顔晒す身の恥。親の無るも知らぬ共もし有ば不孝の罰。佛の愚の地獄へも暖るに二人連で墮られぬ。痛

敷共笑止共一見ながら武士の役見殺しに成がたし。定て金づく五兩十兩の用に立ても助たし。神八幡侍冥利他言せまじ心底残さず打あけやと。嗚ば手と合せ。ア、忝けない有がたい馴染よしみもない私。御誓言での情のお詞涙がこぼれて忝けない。ほんに色外に顯るでござんする。如何にも紙治様と死ぬる約束。親方にせられて逢せも絶指合有て今急に請出す事も叶はず。南の元の親方と爰とにまた五年有る年の中。人手に取れては私は素より主は猶一分立す。いつと死で呉ぬ。ア、死にまじよと引にひられぬ義理詰に風と言替し。首尾と見合せ相圖と定め抜て出やう抜て出よと。いつ何時と最期共其日送りの敢ない命。私一人と頼の母様。南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の飢死もなされふ。是のみ悲さ私とても命は一つ。水臭女と思召も恥おししながら。其恥と捨て死に共ないが第一。死なすに事の濟やうに何様ぞく頼やすと。語れば點頭く思案貌。外にはつと聞驚く思ひがけなき男心。木をら落たる如くにて氣もせき狂ひ。扱は皆嘘の。エ、腹の立二年と云ふ物化された。根生腐りの狐め踏込で一討の面恥のせて腹のよと。齒切さうく口惜涙。内に小春が啣ち泣。卑怯な頼み事ながらか武士様の情。今年中

來春二三月の頃迄私しに逢ふて下んして。彼の男の死に來る度毎に邪魔に成て。期と延しく自のら手と切ば。先も殺さず私しも命助ある。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へば口惜ふとぞんすと膝に凭れ泣く有様。ム、聞届けた思案有風も來る人を見ると。格子の障子ばたくと。立開治兵衛が氣も狂亂。エ、流石賣物安物め。奴性骨見違へ魂と奪はれし巾着切め。切ふの突ふのぞふ障子に寫る二人の横貌。エ、打擲たい踏たい。何吐すやら點頭合拜し嗚く哮るさま。胸と押へ摩つても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに關の孫六一尺七寸抜放し。格子の扱より小春が脇腹。爰ぞと見極めると突に座は遠く。是はと斗り怪我もなく透さず客が飛のり。兩手と攪んでくつと引入刀の下緒手ばしうく格子の柱にがんじ搦み腕のと締付。小春騒ぐな覗くまいぞと。云ふ所に亭主夫婦立歸り是はと騒げば。ア、苦くない障子越に扱身と突込暴亂者腕と障子に括り置く思案有細解な。人立れば所の騒ぎサア皆興へ。小春おじや往て寐やう。あいつ云へ見しり有脇差のつられぬ胸にはつと貫。醉狂の余り色廓には有ならひ。沙汰なしに往なして遣らんしたら。ナア河庄さん私よとそうに思ひやと。いひなく身次第にして皆遣入や。小春こちへと奥の

間の影は見ゆれど縛られて。格子手がせに悶焦は締り。身は煩惱に繋る、犬に劣つた生恥と。覺悟極めし血の涙しぼり泣こそ不便なれ。忽行戻りの身すがら太兵衛。扱こそ河庄が格子に立たし治兵衛ゆな。投て戻んと標のい標で引握る。わいた、わいたとの身怯者。ヤアこりや縛付けられた。扱の盜はさいたな。ヤ活掬賊め胴掬賊めとて、端と打擲。ヤ頑盗めヤ鼻首めとては蹴飛らし。紙屋治兵衛盗して縛れたと呼り喚けば。行通人邊近所も駆集まる。内より武士飛で出盗人呼り、汝の治兵衛が何盗んだ。サア吐せと太兵衛と。搦糞み士にぎやつと令偃せ。起れば踏付踏のめし、引捕て。サア治兵衛踏で腹いよと。足元に突付ると縛れながら頼車。踏付、踏さがされて土塗れ立上て睨まひし。四邊の奴輩よふ見物して踏せたナア。一々に面見覺へた返報する覺へてとれと。へらず口にて逃出す立寄人々ぞつと笑ひ。踏れてもわの願橋のら投て水食せ遣なくと追駈行。人立すれば武士立寄て縛めとき頭巾取たる面体。ヤア孫右衛門殿兄者人。アッア面目なやと。とらと座し土に平伏泣るたる。扱の兄御様のいと走り出る小春が胸ぐら取て引居へ。畜生め狐め太兵衛より先うぬと踏たいと足と上れば孫右衛門。ヤイ、其愚鈍のら事起る。人

と賺すの遊女の商賣今日に見へたる。此孫右衛門の只た今一見にて女の心の底と見る。二年余りの馴染の女心底見付ぬ狼狽者。小春と踏足で狼狽た自己が根生となせ踏ぬ。エ、是非もなや弟とい云ひながら三十に押掛り。勘太郎おするると云ふ六歳と四歳の子の親。六間口の家踏しめ身代潰る、辨別なく。兄の異見と請ることの舅は伯母。姑の伯母とや人親同然女房おさんは我爲にも従弟。結合々重々の縁者親子中。一家一門參會にもおのれが曾根崎通ひの悔みより外余の事何もない。最愛の伯母者人連合五左衛門殿にべもない昔人。女房の甥子に倒され娘と捨ておさんと取返し。天満中に耻の、せんと腹立。伯母一人の氣扱ひ敵に成味方に成。病に成程心と苦しめおのれが耻と包まる、恩しらす。此罰たつた一ツでも行先に的が立。斯ての家も立まじ小春が心底見届。其上の一思案伯母の心も安めたく。此亭主に工面しおのれが病の根元見届くる。女房子にも見變し尤も。心中よしの女郎ア、お手柄結搦な弟と持。人にも知られし粉やの孫右衛門。祭の練衆の狂亂の竟に差ぬ大小ぼつこみ。藏屋鋪の役人と小詰役者の眞似として。痴と盡した此刀捨所がなすいやす。小腹が立やら可笑やら胸が痛いと齒怒し。泣貌のくす皺面に。小春の始終噎

咽り皆知道理と斗にて。詞も涙にくれにけり大地と叩て治兵衛。誤つた〜兄者人三年前よりあの古狸に見入れ。親子一門妻子迄そでになし身代の手縛れも。小春と云ふ鑽倉賊に賺され後悔千万。ふつ〜り心残りねば尤も足も踏込まじ。ヤイ狸め狐め鑽倉賊め思ひ切た證據は見よと肌掛たる守袋。月頭に一枚宛取換したる起請合せて廿九枚。戻せば懸も情もない是や受取と確と打付。兄者人彼奴が方の我等が起請數改ため請取て。貴方が方で火に熱て下され。サア兄貴へ渡せ。心得やしたと涙ながら投出す守袋。孫右衛門押開さ。ひいふうみいよ廿九枚數崩ふ。外に一通女の文是や何じやと開く所とア、そりや見せられぬ大事の文と。取付と押退け行燈にて上書見れば小春様參る紙屋内さんより。讀も果す左有ぬ顔にて懐中し。是小春最前は武士冥利今は粉やの孫右衛門商買冥利。女房限つて此文見せず我一人披見して。起請共に火に入る誓文に違ひない。ア、忝けない夫で私が立ますと又伏しづめば。ハッ〜〜うぬが立の立ぬとは人がまじい。是兄者人片時も彼奴が面見ともなし。いざ御座れ去ながら此無念口惜さ何様もたまらぬ今生の思ひ出女が面一ッ踏御免われと。つ〜と寄て治國太踏エ、〜。しなしたり足りけ三年戀し床しも最愛

可愛も今日といふ今日只た。此足一本の暇と頼ぎいとはつたと蹴て。わつと泣出し兄弟連歸る姿もいた〜歎。跡と見送り聲と上げ歎く小春も苛らしさ。無心中の心中の眞の心の女房の其一筆の奥深く。誰文も見ぬ戀の道別れてこそは歸りけれ

中之巻

福徳に天満神の名と直に天神橋と行通ふ所も神のお前町。營む業も紙店に紙屋治兵衛と名と付て。千早振程買に来るのみ正直商賣の所がらなり老舗なり。良人が巨椀に轉嫁と枕屏風で風ふせぐ。外に十夜の人通り見世と内と一締に女房おさんの心配り。日短のし夕飯時市の側迄使にいて。玉何して居る事ぞ此三五郎めが戻らぬ事。風が冷たい二人の子供が寒のらふ。お末が乳の呑たい時分も知ぬ。阿房に何が成辛氣な奴ぢやと一人言。母様一人戻つたと走り歸る兄息子。チ、勘太郎戻りやつたのお末や三五郎何とした。宮に遊んで乳香たいとお末のたんと泣やりました。左様こそ〜こりや手も足も釘になつた。父様の寐て御座る巨椀であつて暖まりや。此阿房めとふせふと待兼見世に駈出れば。三五郎只一人のら〜として立歸る。こりや愚鈍お末何處に置て來た。ア、ほんは何

處でやら落してのけた。誰ぞ拾たのしらん迄。何處ぞ尋て來ませよ。おのれまわく大
 事の子と怪我でも有たら擲殺すと。喚く所へ下女の玉お末と脊なのに。れふく最愛や辻
 に遊て御座んした。三五郎守するならろくにしやと。喚き歸へれば。チ、可愛やく乳香
 たのらふのと。同じく巨燧に添乳して。是玉其阿房め覺へる程打擲しやくと云へば三五
 郎掉頭 いやくたつた今お宮で密柑と二ツづゝ食いせ。私も五ツ食ふたと。阿房の癖に
 輕口だて苦笑するばかりなり。ヤ阿房にのつて忘りよとした申おさん様。西の方ら
 粉やの孫右衛門様と。伯母御様伴立てお出なされます。是のく夫なら治兵衛殿起そのふ
 。旦那殿起さしやんせ。母様と伯父様が伴立てござるげな。此短のい日に商人が晝中に
 寐た振と見せての又機嫌が悪のらふ。おつとまのせとひつくと起。算盤片手に帳引寄二一
 天作の五くつちんがさつちん。六ちんがにつちん。七八五十六に成伯母打伴て孫右衛門内に
 入ば。ヤ兄者人伯母様是のよふこそく先これへ。私の只今急な算用いたし掛り四九卅六
 匁三六が一匁八分で二分の勘太郎よお末よ。婆く様叔父様お出しや煙草盆持ておぢや。一
 三が三夫おさんお茶上ましやと。口ばやなり。いやく茶も煙草も香には來ぬ。はおさん

いのに年若とて二人の子の親。結構な斗りみめでない。男の性の悪いの皆女房の油断の
 ら。身代破り夫婦別れる時は男はりの耻じやない。ちと目とあいて氣に張と持やいの
 と云へば。伯母様愚など。此兄とさへ欺す不覺悟者女房の異見なを暖のに。ヤイ治兵衛此
 孫右衛門とぬくくと欺し。起請迄のやして見せ十日も立ぬになんじや請出す。エ、汝の
 ナア小春が借錢の算用の置われと。算盤押取庭へ瓦落理と投捨たり。是の近頃迷惑千万。
 先度より後今橋の間屋へ二度。天神様へ壹度ならでの敷居より外出ぬ私。請出す事は扱置
 思ひ出しも出すにこそ。云やんなく夕部十夜の念佛に講中の物語。曾根崎の茶屋紀伊國
 屋の小春といふ白人に。天満の深い大盡が外の客と追退。直に其大盡が今日明日に受出す
 との是ぎた。賣買高い世の中でも金と思鈍の澤山なといろくの評判。此方の親父五左衛
 門殿當と名と聞ぬいて。紀伊國屋の小春に天満の大盡と治兵衛めに極つた。噂の爲にの甥
 なれど此方の他人娘が大事。茶屋者請出し女房の茶屋へ賣からふ。着類着そげに疵付られぬ
 間に取返してくれふと。沓脱半分下りられしとなふ騒々敷神妙も成と。明さ聞さ聞届
 て上のと押宥め。此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しに今日昨日の治兵衛でない

曾根崎の手も切れ本人間の上々と聞ば跡のらはみろへるそもいなる病ぞや。其方の父親の伯母が兄最愛や光譽道清往生の枕と上。聲なり甥なり治兵衛が頼むとの一言の忘れ。其方の心一ツにて頼まれし効もないいのと。岸波伏て恨泣治兵衛手とうち。ハア、よめたく取沙汰の有小春の小春なれど。請出大盡大きに相違兄貴も御存。先日暴亂で踏れた身すがらの太兵衛。妻子眷屬持ぬ奴金に在所伊丹より取寄る。とつくに彼奴めが受出すと私に押へられ。此度時節到来と受出すに極つた。我ら存知も寄らぬ事と云ばおさんも色と直し。假令私が佛でも男が茶屋者請出す。其最負せふ善がない是斗りの此方の人に徹塵も呼詐ない。母様證據に私が立ますと。夫婦の詞割符も合さては左様のと手と打て伯母の心と安めしが。ム、物には念と入うこと先々婿敷とてもに心落付ため。あたむくの親父殿疑がひの念なきやうに誓紙書すが合點の。何が扱千枚でも仕らふ。いよく満足則ち道にて求めしと孫右衛門懐中より。熊野の午王の村鳥比翼の誓紙引のへ。今の天罰起請文小春に縁切思ひ切。偽り申すに上り梵天帝釋下の四大の文言に。佛前へ神前へ紙屋治兵衛名としつゝり血判とすへて差出す。ア、母様伯父様のお蔭で私も心落付

子中なしても竟に見ぬ堅め事皆喜悅んで下さんせ。ナ尤々此氣に成ば堅まる商事も繁昌しよ。一門中が世話のくも皆治兵衛為よのれ。兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おじや早ふ歸つて親父に安堵させたい。世間がひへる子供に風ひやしやんな。是も十夜の如來のお蔭是のら成共お禮念佛。南無阿彌陀佛と立歸る心ぞ直に佛なる。門送りさへそくくに敷居も越や越ぬ中。巨燧に治兵衛又ころり被る蒲團の格子編。また曾根崎と忘すのと呆れながら立寄て蒲團と取て引退れば。枕につた涙の滯身も浮はり泣るたる。引起し引立巨燧の橋につき居顔つくも打詠め。あんまりじや治兵衛殿。夫程名残惜くば誓紙書ぬがよいいの。一昨年の十月中の亥の子に巨燧明た祝義とて。まあ爰で枕並べて此のた女房の懐中に鬼が住る蛇が住る。二年と云ふ物果守にして漸々母様伯父様のお蔭で。睦じい夫婦らしい寢物語もせふ物と。樂む間もなく真に酷いつれない左程心残りば泣しやんせ。其涙が蜷川へ流て小春の涙で吞やらふぞ。エ、曲もない恨めしやと。膝に抱付身と投伏口説たて、ぞ歎きける。治兵衛眼と押拭ひ悲しい涙の目より出。無念涙は耳のら成共出るならば云すと心も見すべさに。同じ目より溢る涙の色の變らねば。心の見へぬ尤もく

人の皮着た畜生女が名残も絲瓜もなん共ない。意根有身すがらの太兵衛金は自由妻子はなし。請出す工面しつれ共其時迄の小春めが太兵衛が心に随はず。少も氣遣なされな假令こなさんと縁切れ添れぬ身に成たり共。太兵衛めに請出されぬ若し金せきで親方より遣るならば物の見事に死んで見しよと。度々詞と放ちしが是見やのいて十日も立ぬうち太兵衛めに請出さるゝ腐れ女の四足めに。心の夢く残りぬ共。太兵衛めが隠言吐治兵衛身代息盡ての金に手詰つてなんど。大坂中と觸廻り問屋中の突合にも。面とまぶられ生耻のく胸が裂る身が燃る。エ、口惜い無念な熱い涙血の涙。ねばい涙と打越へ熱鉄の涙が溢るゝとどうと伏て泣ければ。はつとおさんが興さめ顔。ヤア夫なれば最愛や小春の死にやるぞや。ハテサテなんぼ利發でも流石町の女房じやの。あの無心中者なんの死なふ。或とすへ薬香で命の養生するの。いや左様でない私が一生云ふまいとは思へ共。隠し包でむさく殺す其罪も怖ろしく。大事の事と打明る小春殿に無心中芥子程もなけれ共。二人の手と切せし此さんが機關。こなさんが浮々と死ぬる氣色も見へし故。あまり悲さ女は相見互ひ事切れぬ所と思ひ切良人の命と。頼むゝとのさ口説た文と感じ。身にも命にも

のへぬ大事の殿なれど。引れぬ義理合思ひ切との返事私や是守に身とはなさぬ。是程な賢女がこなさんと契約違へ。おめく太兵衛に添ふもの。女子の我人一むきに思ひ返しのないもの死にやるいのく。ア、ア、飄な事サアサア何卒助てくと。騒げば良人も敗亡し。取返した起請の中しらぬ女の文一通兄貴の手へ渡りし。おぬしうらいた文な。夫なれば此小春死ぬるぞ。ア、悲しや此人と殺して。女どしの義理立ぬまづこなさん早ふ行て何卒殺て下さるなと。夫に絶り泣沈む。夫とても何とせん半金も手附と打撃とめて見る斗り。小春が命の新銀七百五十匁香さねば此世に止むる事成す。今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覚。打ちしやいでも何處から出る。なふ仰山な夫で濟はいと安しと。立て簀笥の小抽匣明て惜氣もないませの。紐付袋押開き投出す一包治兵衛取上げ。ヤ金の然も新銀四百目こりや何様してと。我置ぬ金に目覺る斗りなり。其金の出所も跡で語れば知れると。此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺りしたれ共。夫の兄御と談合して商賣の尾に見せぬ。小春の方の急なとそこに四一貫六百匁と。ま一貫四百匁と大抽匣の鎖明けて簀笥とひらりと飛八丈。京縮緬の明日のない良人の命しらす茶うら。娘のお末が両面の紅絹の小袖に

身と焦す。是と曲てり勘太郎が手も綿もない袖なしの。羽織も交て郡内の仕末して着ぬ淺黄裏。黒羽二重の一張裏定紋丸に蕉の葉の。のきも退れもせぬ中の内裸でも外錦。男餅の小袖造さらへて物敷十五色。内端に取て新銀三百五十匁よもや貸ぬと云との。無い物迄も有顔に良人の耻と我義理と。一ツに包む風呂敷の中に情と籠にける。私や子供何着いでも男の世間が大事。請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせと。云へ共始終差俯向しく泣て居たりしが。手附渡して取とめ請出して其後。圍ておくの内へ入るにしてあら。其方の何と成とぞと云れていつと行當り。アツア左様じや。ハテ何とせよ子供の乳母の飯糰の。隠居成共しませふとわつと叫び伏沈む。余りに冥加恐敷此治兵衛に親の罰天の罰佛神の罰の當らず共。女房の罰一ツでも將來のよふない咎免してたもれと。手と合せ口説敷けば。勿体ない夫と拜むといの手足の瓜と剣しても。皆良人の奉公紙問屋の仕切銀。何時のらる着類と質に問とわたし。私が筆筒の皆明敷夫惜い共思ふにこそ。何云ふても跡へんでの返らぬ。サア〜早ふ小袖も着のへて完爾り笑ふて。往のしやんせと。下に郡内黒羽二重縞の羽織に沙綾の帯。金拵らへの中脇差今宵小春が血に染

との佛や知召さるらん。三五郎爰へと風呂敷包肩に負せて供につれ。銀も肌身にしつのと付立出る門の口。治兵衛は内にお居やると毛頭巾取て入と見れば。南無三寶具五左衛門。是の扱折も折よふお歸り被成たと夫婦の顛倒狼狽る。三五郎が負ふたる風呂敷振ぎ取ておつのと居り尖り聲。女郎下につつららふ。尊殿是の珍らしい上下着飾り脇差羽織天晴よ衆の金遣ひ。紙屋との見ぬ新地へのお出の御精が出ます。内の女房いらぬ物おさんに暇遣や伴に來たと。口に針有苦い顔。治兵衛は兎角の言句も出ず。爺様今日の寒いによふ歩行しやんす。先お茶一ツと茶碗としほに立寄つて。主の新地通ひも最前母様孫右衛門様お出なされて。段々の御異見熱い涙と流し。誓紙と書ての發起心。母様に渡されしがまだ御覽被成ぬ。サ、誓紙との此とかと懐中より取出し。阿房狂ひする者の起請誓紙の方々先々書出し程書ちらす。合點が往るぬと思ひく來れば案の如く。此態でも梵天帝釋の此手間で去状書と。寸々に引さいて投捨たり。夫婦のあつと顔見合呆れて詞もなりのしが。治兵衛手とつゝ頭とさげ。御立腹の段尤も共れ詫すの以前の。今日の只今より何事も慈悲と思召し。おさんに添せて下されのし。譬は治兵衛を食非人の身と成。諸人のはしの

余りにて身命の繋ぐ共。おさん急度上に居憂め見せず幸いめさせず。添ねばならぬ大恩
 有其譚の月日も立私の勤方身上持直し。お目に懸れば知るゝと夫迄の目と塞いでおさ
 んに添せて給のれと。はらゝ溢す血の涙壘に喰付詫ければ。非人の女房に猶ならぬ
 去狀書く。おさんが持參の道具衣類數改めて封つけんと。立寄は女房あはて着物の數の
 揃ふて有。改むるに及ばぬと駈塞がれば。突退ぐつと引出し。コリヤおんじや又引出して
 もちんがらり有たけこたけ。引出しても。繼切れ一尺あらばこそ葛籠長持衣裳櫃。是程の
 らに成つたると鼻の怒の眼玉も居り。夫婦が心の今更に明けて悔敷浦島の。巨燧浦團に身
 と寄せて火にも入たさ風情なり。此風呂敷も氣遣と引解き取散し。さればこそく是も賈
 屋へ飛すの。ヤイ治兵衛女房子共の身の皮はぎ。其金でおやま狂ひ活胴拘賊め女房共の
 伯母甥なれど此五左衛門といわの他人。損とせふ好味がない孫右衛門に断り兄が方ら
 取返す。サア去狀くくと七重の扉八重の鎖。百重の團みの通るゝ共通れ方なき手詰の段
 。ナ、治兵衛が去狀筆でい書ぬ是御覽せ。おさんさらばと脇差に手とくる。繼り付てな
 ん悲しや。爺様身に誤まり有ればこそ段々の詫言。おんまり利運過ました。治兵衛殿こそ

他人なれ子供孫可愛ふの御座らぬ。わしや去狀の受取ぬと。良人に抱付聲と上泣叫ぶこ
 と道理なれ。よいゝ去狀いらぬ女郎こいと引立る。いや私や往ぬ厭も厭れもせぬ中
 何の恨に晝日中。夫婦の恥の晒ぬと泣詫れ共聞入す。此上に何の恥町内一杯喚いて行と。
 引立れば振放し小腕とられ下々と。踰限足の爪先に可愛や確と行わたる。二人の子供が目
 と覺し。大事の母様なせ伴て行祖父様め。今から誰と寝やうぞと慕ひ歎けば。ナ、最愛や
 生れて一夜も母が肌と放さぬもの。晩のらひ爺様と寝しや二人の子供が朝ふさ前忘す。必
 らずくは山吞せて下されなふ悲しやと。云ひ捨る跡に見捨る子と捨る。敷に夫婦の二股竹
 永き別れと

下之卷

戀情爰と瀬にせん観川。流るゝ水も行通ふ人も。音せぬ丑満の空十五夜の月冴て。光りの
 暗さ門行燈大和屋傳兵衛と一字書。眠り勝成る擧析に番太が足どり千鳥足。こよゝくも
 聲更たり。駕籠の乗いゝふ更たのとの上の町ら下女子。迎ひの駕籠も大和屋の。潜り瓦落
 くつゝと入。紀伊國屋の小春さん借やんしよ。迎ひとはりの聞へ跡の三ッ四ッ撥扱

の程なく潜りによつと出。小春様の御泊じや駕籠の衆直に休ましやれ。ア、云ひ残した是花車さん。小春様に氣と付て下さんせ。太兵衛様へ身請がすんで金請取たりや預り物。酒過させて下んすなと。門の口より明日待ぬ治兵衛小春が土に成る。種蒔ちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時休むは八ツと七ツとの間にちら付短葉の。光も細く更る夜の川風塞く霜みてり。また夜が深い送らせましよ。治兵衛様のね歸りじや小春様起しませ夫呼ませと亭主が聲。治兵衛潜りよぐわさと明け。コレ、傳兵衛小春に沙汰なし耳へ入ば夜明け迄括られる。夫故よふ寐させて扱て往ぬる。日が出てゐら起していなしや。我等今より歸ると直に買物の爲京へ登る。大分の用なれば中拂ひの間に合やうに歸るの不定。最前の金で其元の算用合も仕廻。河庄が所へも後の月見の拂と云ふて四ツ百五十匁請取とつて給らふしと。福嶋の西悦坊が佛檀買た奉加銀一枚回向しやれと遣つてたも。其外に懸り合ひハア夫よ。磯市が花銀五ツ是斗じや仕舞て寤やれ。さらば、戻つて逢ふと。二足三足行より早く立歸り。脇差忘れたちやつと。なんと傳兵衛町人のこゝが心安い。武士なれば其儘切腹するであるの。我ら預て於てとんと失念小刀も揃ふたと。渡せば取つてしつ

と差。是さへあれば千人力もう休みやれと立歸る。追付お下り被成ませよふ御座りまも。そこ、跡は樞械とごつとりと。物音もなく鎮まれり。治兵衛のつと去ぬる顔。又引のへす忍び足大和屋の戸に絶り。内と覗いて見る内に間近き人影嗅驚して。向ひの家の物影に過る間暫時身と忍ぶ。弟故に氣と碎く粉屋孫右衛門の先にたち。跡に丁兒の三五郎が脊中に翊の勘太郎伴れ。行燈目的に駈來り大和屋の戸と叩。ちと物問ませふ紙屋治兵衛の居りませぬの。一寸逢せて下されと呼れば。扱ひ兄貴と治兵衛の身動きもせず忍ぶ。内より男の寝ぼれ聲。治兵衛様のなまらつと先に京へ登とお歸り成れた筈にで御座らぬと。重て何の音信も涙はらく孫右衛門。歸らば道で逢となるもの京へとの合點がのぬ。ア、氣遣ひで身が慄ふ小春と伴ての行ぬのと。胸にぎつくり横たゐる。心苦し堪へぬ又戸と叩ば。夜更て誰じやもう寝ました。御無心ながら一度お尋申た。紀の國屋の小春殿のお歸り被成たのもし治兵衛と連立て行の成れぬの。ヤ、何じや小春殿の二階に寝てじや。ア先心が落付た心中の念のない何處に踏んで此苦とのける。一門一家親兄弟が片唾と香で臍と揉といよも知るまい。眞の恨に我身と忘れ無分別も出やうのと。異見の種に

勘太郎と連て尋ねる甲斐もなく。今迄逢ぬ何ととほろく涙の一人言。隠るゝ間だの隔てねば聞へて治兵衛も息と請。涙呑込斗りなり。ヤイ三五郎阿房めが夜るゝうせる所外に知らぬかど。云へば阿房の我名ぞと心得て。知つて居れと爰で恥ぢ敷と云われぬ。知て居るといサア何處じや云て聞せ。聞た跡で叱らしやんな毎晩ちよこゝ行所一の側の納屋の下。大白痴め夫と誰が吟味する。サアこい裏町と尋て見ん勘太郎に風ひのすな。こくにも立ぬ父めと持て可愛や冷たいめとするな。此冷たさで仕舞は好がひよつと爰めに見まい。憎やゝの底心の不便の裏町といざ尋んと行過る。影隔たれば駈出て跡懐りしげに伸上り。心に物と云ひせて十悪人の此治兵衛。死に次第共捨置れず跡のら跡まで御厄介勿体なやと。手と合せ伏拜み。猶此上のお慈悲に子供がととと斗りにて暫時涙に咽びしが。兎ても覺悟と極しうへ小春や待んと。大和屋の潜りの透間さし覗けば。内にちら付人蔭の。小春じやないの待としらせの合圖の咳。エヘンくゝのつちくゝエヘンに柏子木打ませて。上の町ら番太郎がくるゝたぐる風の夜の。せきゝ廻る火用心こゝざゝゝも。人忍ぶ我に辛き葛城の。神隠れして遣り過し透と鏡ひ立寄ば。潜

り内ら密と明く。小春の。待てる治兵衛様早ふ出たいと氣と急ば。せく程廻る車戸の明ると人や聞付んと。しやくつてあくればしやくつて響き。耳に轟く胸の中治兵衛が外ら手と添ても。心震ひに手先も震ひ。三分四分五分一寸の先の地獄の苦みより。鬼の見ぬ間と漸々に明て嬉しき年の朝。小春の内と抜出て互ひに手と手と取るし。北へ行ふる南への西の東の行末も。心の早瀬岨川流るゝ月に逆らひて足とはりに

名どりの橋づくし

走り書。謠の本の近衛流野郎帽子の若紫。悪所狂ひの身の果の斯なり行と定せりし釋迦の教も有との。見たし愛身の因果經。明日の世上の言草に紙屋治兵衛が心中と。仇名散り行櫻木に。根彫葉ぼりと繪双紙の版摺紙の其中に有共しらぬ死神に。誘われ行も商賣に疎き報と觀念も。とすれば心ひのされて歩行悩むぞ道理なり。頃十月十五夜の月にも見ぬ身の上の。心の闇の験のや。今置霜の明日消る果敢なき壁の夫よりも。先へ消行閨の中最愛可愛と締て寝し移香も何と流の岨川。西に見て朝夕渡る此橋の天神橋の其昔。菅相丞と申せし時筑紫へ流罪給ひしに。君と暮ひて太宰府へたつた一飛梅田橋。跡老松の縁橋。

別れと歎き悲みて跡も憶る、櫻橋。今に咄しと聞渡る一首の歌の御威徳。あゝる尊き荒神の氏子と生れし身と持て。其方も殺し我も死ぬ元いと問へば分別の。あの可憐な貝殻に一杯もなき蜆橋。短のき物の我々が此世の住居秋の日よ。十九と廿八年の今日の今宵と限りにて。二人命の捨所爺と婆々との末迄も。まめで添へんと契りしに。九三年も馴染いで此災難に大江橋。あれみや浪花小橋のら舟入橋の濱傳ひ。是迄来れば来る程の冥途の道が近付と。歎けば女も縋り寄りも此道が冥途のと。見のりす顔も見へぬ程落る泪に堀川の橋も水にや浸るらん。北へ歩行ば我宿と一目に見るも見歸らず。子供の行衛女房の哀れも胸に押包み。南へ渡る橋柱数も限らぬ家と。いゝに名付て入軒家。誰と伏見の下り舟着ぬうちにと道急ぐ。此世と捨て行身への間も恐し天満橋。淀と大和の二川と一ッ流の大川や。水と魚との伴て行我も小春と二人連。一ッ刃の三ッ瀬川手向の水に受たやな。何の歎のん此世でこそは添す共。未來の云ふに及ず今度のく。つゝと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ッ蓮の頼みに一夏に一部夏書せし。大慈大悲の普門品妙法蓮華京橋と。越れば到る彼岸の玉の臺に乗へて。佛の姿に身となり橋衆生濟度が儘ならば。流の人の此後の絶て心

中せぬやうに。守りたいぞと及びなき願ひも世上の世迷言。思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙り山の端白くほのく。あれ寺の鐘の聲こゝろく斯していつ迄の。とても存命はてぬ身と最期急ん此方へと。手に百八の珠の緒と泪の玉に繰ませて。南無阿彌島の長寺敷の外面のいさゝ川。流れ漲る樋の上と最期所と着にける。なふ何時迄うのく歩行ても。爰ぞ人の死に場とて定まりし所もなし。いさ爰と往生場と手と取土に坐しければ。さればこそ死に場の何處も同じと云ながら。私しが道々思ふにも二人が死に顔並べて。小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば。おさん様より頼みにて殺して呉るな殺すまい挨拶切と取替せし其文と反古にし。大事の男と喚しての心中の流石一坐流の勤めの者義理しらす偽り者と。世の人千人万人よりおさん様一人の下見。恨み嫉みも嘸と思ひ遣り。未來の迷ひは一ッ。私しと此處で殺してこなさん何處ぞ所とのへついと脇でと。うち靠れ口説は俱に口説泣。ア、愚痴なと斗りおさんの肩に取りのやされ。暇と遣れば他人と他人。離別の女になんの義理道すがら云ふ通り。今度のくすんぞ今度の先の世迄も夫婦と契る此二人。枕と並べ死るに誰が識り誰が嫉む。サア其離別の誰が所爲私しよりこなさん猶愚

痴な。身體があの世へ伴立の所々の死にとして譬へ此身體の鷺鳥につゝられても。二人の魂を付纏わり地獄へも極樂へも連立て下さんせと。又伏沈み泣ければ。オ、夫よく此身體の地水火風死れば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の魂放れぬ驗合點と。脇差すばと扱はなし元結際より我黒髪ふつゝと切て。是見や小春此髪の有内は紙屋治兵衛と云ふおさんが良人。髪切つたれば出家の身。三界の家と出妻子珍寶不隨者の法師。おさんと云ふ女房なければおぬしが立る義理もなしと。泪ながら投出す。ア、嬉しふと云ふと小春も脇差取上げ洗ひつ漉つ撫付し。酷や惜げも投島田はらりと切て投捨る。枯野の芒夜半の霜俱に亂るゝ哀れさよ。浮世を逃れし尼法師夫婦の義理とは俗の昔。迎ものにとさつぱりと死場も替て山と川。此細の上と山と准らへ和女が最期場。我々又此流れにて縊る最期の同じ時ながら。捨身の品も所も替ておさんに立抜く心の道。其抱帯此方へと。若紫の色も香も無常の風に縮細の此世彼の世の二重まり。燵の炬木にしつゝと括り先と結んで。狩場の雉子の妻故我も首締縮る畏結。我と我身の死拵へ見るに目も呉心くれ。おさん夫で死なしやんすの所と隔て死ぬれば側に居るも少しの間。此處へくと手と取合又で死ぬるは一

思ひ無苦痛なされうと。思へば最愛くと止めのねたる忍び泣。首くゝるも喉突も死ぬるに愚のの有物の。よしない事に氣とふれ最期の念と亂さす共。西へくと行月と如來と拜み目と放さす。只西方と忘りやるな心残りの事有ば云ふて死にや。何も無いと云ふおさん定てお二人の子達の事が氣にのゝる。アレ瓢な事云ひ出して又泣しやる。父親が今死ぬる。其何心なくすやくと。可愛や腹顔見るやうな忘ぬり是はつゝのりと岸波と伏て泣しづむ。聲も争そふ群鳥。柵はなれて鳴聲の。今の哀れと問ふやとていと涙と添にける。なふおれと聞や二人と冥途へ迎ひの鳥。午玉の裏に誓紙一枚書度。熊野の鳥がお山にて三羽づゝ死ぬると。昔より言傳しが我と其方が新玉の歳の始に起請の書初め。月の始月頭書し誓紙の數々其度事に。三羽宛殺せし鳥の許多ぞや。常に可愛くと聞今宵の耳への其殺生の恨の罪。むくひくと聞ゆるぞや報ひと誰故ぞ我も多幸死ととぐる。免て呉と抱き寄れば。いや私故と締寄て顔と顔ととうち重ね。泪に閉る鬢の髪野邊の嵐に氷けり。後に響く大長寺の鐘の聲南無三寶長き夜も。夫婦が命短の夜と早明渡る晨鐘に最期の今ごと引寄て。跡迄残る死顔に泣顔残すな残さじと。莞爾笑顔のしろくと霜に凍て手も慄ひ。

我のら先に目も眩み刃の立姿も泣涙。ア、急まい〜早ふ〜と女が勇むと力草。風誘ひ
 來る念佛の我に勸むる南無阿彌陀佛。彌陀の利劍とぐつと刺され引居ても反返り。七頭八
 倒このいゝに切先咽喉と外れ。死にもやらざる最期の業苦俱に亂れて苦みの。氣を取直し
 引寄て鏢元迄差通したる一刀。刺り苦しき曉の見果ぬ夢と消果たり。頭北面西右脇臥に
 羽織打着せ死骸と繕ひ。泣て盡せぬ名残の袂見捨て抱帯と手操寄せ。首に畏と引掛る寺の
 念佛も切回向。有縁無縁乃至法界平等の聲と限りに極の上より。一蓮托生南無阿彌陀佛と
 睡つし暫時苦む生瓢。風に揺るゝ如くにて次第お絶る呼吸の道。いさせまどむる樋の口
 に。此世の縁の切果たり。朝出の漁夫が網の目に見付て死んだヤレ死んだ。出逢〜と聲
 くに言廣めたる物語。直に成佛得脱の誓ひの網島心中と目ごとく涙とけけにけり

天の網島終

宵庚申

言子保七三四月廿二日初興行 近松門左衛門作
 上 卷

花のお江戸へ六十里梅の難波へ六十里。百二十里の間の宿都離れて遠江。濱松の一城主淺
 山殿の御在國。町家〜の賑ひ商ひにたゆみなく。武士は弓馬に怠らず日ませ〜のお鷹
 狩。上一人の躰みより犬も油断ならざりし。お家相傳の弓頭坂部郷左衛門六十の緘の夜
 晝なく。お側去らずの野出頭今日も鷹野のお供にて。留守の邸の大手の見付お鷹歸りの御
 入とて。晝當場より先案内給人若黨お出入の町人迄。降つて湧たる忙がし御成座敷のの
 へ疊。床に掛物臺子の埃はいつ拭ふつ。お庭の掃除とつさ草引薄茶挽。茶道の引木にもま
 る。實誠忘れたりとよ門の盛砂。小者の箒にもまる。臺所の板本に青物の淵魚鳥の
 山。献立の三汗九菜。おちた肴と吟味の役人。こりや目出鯛と三枚におろし山葵の八百屋
 が請取。南京の皿蒔繪の家具善盡したる饗應なり。組下の二ばんばへ金田甚藏岡軍右衛門
 大橋逸平。打揃ふたる血氣さのり立のけのんこのあたまがら。裾のかるすの勝手見廻。い

宵庚申

づれも御苦勞。今日のお鷹野より直ぐお腰掛らるゝとな急なお成で嘸取込。お料理組もう出来たの早し。我々も幸ひ非番用あらば遠慮無用と挨拶口々。座敷口より小姓山脇小七郎。生花屑と花盆に花の露うく前髪ざり。するゝと立出で。是のゝ日比の御懸意お揃ひなされての御出で。主人郷左衛門嘸満足。唯今の殿様前代と違ひ何角に付て輕ひお身持。壁に馬乗のけし今日のお成。主人の御供我々が當惑掃除等もとこ。書院の筆架のざり石。活花も手づゝながら間に合するも奉公。御内見の上御直し下されと詞も風も出過ぎる。若衆とぬの味噌の味の屋敷に極りし。金田甚藏岡大橋何のゝ君のお手際解事有ふ。去りながら人に心と盡させ無下ない心が一ツの庇と。目顔も明ぬ取込みに顔で睨みつ袖引つ。手の中つまむも一むろし古ひ仕掛が田舎なり。坂部郷左衛門衣服の奇麗も世につれて戒むるといなければ共。上に従ふ木綿羽織に紺股引。鷹野出立のりしげにすたゝと立歸り。家來共掃除の出来たの。いづれもお見廻過分。いやさゝ年よりまゝい物。岩松村岩水寺の門前よりお暇受け。たつた一飛と思へども氣情も足も心斗り。去り乍ら殿に今一こぶし遊ばし御入有ぞ。急事のある先お献立と一見と。長々と書付た

る半讀みさし。大きにたまげ是やなんじや。殿の御膳の一汁三菜と先達て云ひ越す所三汁九菜の魚鳥づくし。身が身上と板本で切叩くの此献立の誰が指圖と。以ての外の不機嫌に頭も光りちらのせり。小七郎温和に憚りながら此義のお侍中の差圖ならず。二三日以前よりお長屋に逗留致し罷りある。大坂の住人勅油掛町八百屋半兵衛と申して。元の御當地遠州生れ私との腹がりの兄。様子あつて五才の時大坂へ立こへ。町人に奉公し商人の養子と成り。今の親の八百屋伊右衛門。實父山脇三左衛門の私が生れし年相果。當年十七年親の墓への年忌まいり。私事も懐のしく召使のる、御主人へ。御禮も申たしと逗留致せし兄半兵衛。商賣の八百屋殊更料理さ。幸と今日の御献立と致させし不調法の私。お目出度き折のら御機嫌と直され。兄へも御逢ひ下されのしと恐れ入たる謝罪に。主人の顔も打とくれば。是半兵衛殿能き折のお目見へ。お献立も仕直すため早うと叫立る。聲と力に兄半兵衛魂の武士なれど。三十余年町人に業も姿も染付し。料理はのまとのりとめに伊前と云へば氣もおくれ。臺所の板敷けつまづくやら滑るやら。はふゝ道出で手とつゝのへお國の作家風も存せずお献立と致せし無調法。先達てお使に一汁三菜との意なれども。

大坂藏屋敷留主居方の振廻でも。随分軽いが二汁五菜結構にいたんく。朝鮮人の響應みだうへも雇われ。七五三五々三山影中納言の家切のた。料理一通りの承り傳へしゆへ申してもお大名の膳部。よもや一汁三菜とお使の聞あやまりと。云われぬ念と入過しの猶無調法。お好みの一汁三菜我らが手際で。さりとしやんと切立焚立鹽梅能の侈機嫌よき侈意と松茸。つけ竹の子なまにのらぬ仕様が秘密と。口も料理の鹽梅加減郷左衛門打笑ひ。山脇三左衛門が世倅なれば身が爲にも家來筋。親の廟參氣特く。幼少より他國に育ち當侈代の風儀知らぬの道理。料理の勿論衣類諸道具物て無益の費お嫌ひ。上方でも風聞のないる去年十月高師山のお狩場。身が相役佐野文太左始めての侈供に縮緬の羽織着られたと。殿がぞろくろと侈覽なされ。縮緬の風にしぶき面倒な。重ねておける是と呉ると侈意なされ。侈手づのら下された召換の木綿羽織。さしもの文太左はつと赤面。其後此事と工夫すればお供に參る文太左。縮緬の羽織着めされふ様がおりのない。兼て文太左におし合せ諸家中の見るまへ。木綿羽織と下されし美麗侈停止となく。自然奢りと止る一家中への侈意見。夫と察せぬは家中の二番ばへ達のさまと見よ。木挽町堺町の役者ら

つりととる衣紋付。おのが身の分限も知らず。一がいに殿がお吝いくと勿体ない影言。綾錦と召れてもお大名綿服と召れてもお大名。齊藤別當實盛が最後に錦の直垂の着たれども。源氏と捨平家へ返忠の武士心の汚れし濫褻同然。又佐々木源藏の二君も仕へず濫褻の肩と裾に結び。頼朝の御代と待しの心の錦。今の武士の美麗と好むの實盛。佐々木が遺風と芳しと思召す。此殿の侈行跡の下と寛げ世と豊に。賣買と安くせん爲の御儉約。武士の元より町人の其方等迄此恩と忘るゝな。朝夕の御膳部も一汁三菜。酒も數と定められ三盃限り。今日のおもうしも鹿相程御意に入る献立も書に及ばず。コノ食の赤まじりの古臭いとすつくりと焚せ。あき立汁に小菜のうらし向漬のあろし大根。鱒鱒。焼物のむろの酢いり夫も二ツ切。引て古茄子の香の物扱ひらに。それよ。家來に持せし山の芋是へくと呼出せば。五尺斗りの山の芋仲間二人が指荷ひ。料理場の板敷へ蒔と放して昇あぐれば。半兵衛横手と打扱もづなし。御當地の芋所の一生の見始め。大坂で見世物に致したら錢銀の掴み取。第一お家の吉相何故と申すに今日は殿の御成り且那の御出世。追付山の芋のら颯にれ成なされふと。輕薄ぬらくら口に鰻の油とろりと乗掛れば。さればく今日の仕合

せ。手下の百姓殿のお成りと聞付。身が踊るさの道料理に爲よ迎くれしは幸ひ。今日の御馳走これ一種。お身が自慢の庖丁随分切形と出のしてくれ。頼むくと詞の下お成門の貫の木之音。すは殿の御入と聞けば。郷左衛門も次の間に袴改めお迎ひとて出ければ。由勝小七岡大橋金田も續て急ぎゆく。半兵衛料理に心は忙しくうつたり舞たり身は一つ。薄刃追取り五尺の大芋三寸斗り切調へ。つい皮むいてちよきくくす醬油の出し鹽梅煮のたは急ぐ。殿のお顔も拜みたし座敷口より指眼けば。御城主も股引がけ上段に着玉よ。一間隔て、近習の人々鷹匠犬引列卒足輕。玄關の小庭に居余り。臺所口と押通り長屋くく休息場。奥に料理の勝手と急ぎ。主郷左衛門殿の御膳目八分に持出れば。思ひくく給任の作法。お汗がのるるへ食繼。初献の肴は鯛の足一され當の引重箱。二献めも御機嫌よくお盃がのりつて平の蓋。有がたがための臺引物。定めを通り御酒三献吸物の殼覗。思ひの外の無馳走に上への御悦喜納の盃。坂部もてうと下されて首尾よく御膳のとれにけり。郷左衛門板本に立はたより半兵衛と睨付。今日の料理の半一種太い所を御目に懸るが御馳走。何様に切ばとて五尺余りの大芋、一寸足すに切り碎く言語同断手打にする奴なれども

他國者と云ひ御成の時節。屋敷に叶ぬ出てうせべいと往詰つたる腹立の詞少なに凄じ、半兵衛膝も動さず是の旦那の御意とも覺へず。今日の御料理随分切形に氣と付。心一ばら出のせしと一分自慢。御褒美のなされいで存じの外の侈叱り。惣じて貴人大人への何に限らず。斯様の珍しき物お目に懸ぬが料理のならひ。大名高家の大様に一度お目に振れられては澤山に有る物と思召し。隣國のお出合にも身が領内には。珍しき山の芋有なごどお國自慢のれ咄しの上。ふと餘國より侈所望の時跡へも先へもいゝす。國中と尋ねても有合せず。自然殿様と虚つきにして退る。そこと存じて常の如くの調味は旦那へお奉公と存せしに。侈機嫌に違ひしは身の不仕合せ如何様共侈存分に遊ばせと。どこやら詞のひつはなし残る所が武士氣質。郷左衛門口おんぞり。ここりや尤も尤もやまう申したく。其方が云ひ分真直に侈前へ申すが又馳走。やれくく山の芋で足突たとどつと笑へば。早お立とお供廻りが振出す毛鎗臺笠立笠大鳥毛。乗物引馬嘶き立侈城内迄お禮の供郷左衛門もお興にそひ。暮ぬ間の侈歸城と氣も夕陽の入日影。座敷の仕廻は侍がた庭の締は中間小者。役めくく立別る。臺所には半兵衛一人庖丁生繪箸薄刃俎板取片付煙管くはへて吹

息に鉄柄が皺と延しけり。二番ばへ共はらくと立寄り。拙者らは郷左衛門組下の弓役共。伊身は山脇小七郎の舎兄とな。早速の無心弟の事と頼むも馬鹿らしけれど。前髪姿に神を瓜先よりぎり／＼迄打込み。毎日／＼しつ心なき玉章奉書の代も五百目斗り。身上と紙に打こんでもつれない小七郎。兄は是非所望申した。是軍右衛門がねまり申して手をつゝのしいぞ。外方にも惚人が有る奉書代は愚な事。君に掛つて壹貫五百が外郎積だ此甚藏。弓矢八幡身にくれる。此逸平にくれるふと。耳際に囁付ごとく悪風吹のけ眼もくらみ。前後忘する斗りなり煙管も放さず半兵衛大あぐら。御城下のならひ衆道御法度。おと云へば弟が首が御坐らぬいの。當國は女の淫亂は下々迄御せい道衆道にのこ構ひなし。三人の内どれへなりと魂すへて返事せると。もやつく後に小七郎。是まで請し文一抱へ半兵衛が前におき。兄者人の手前も耻らしながら斯なる上は隠されず。敷ならぬ私にお執心とは振袖の身の思ひ出忝いは山々なれど。獨ならず彼方此方の文の敷。無下に返すも情しらずと請取ては置ながら。一通も封と切らぬがいづれも様への立分。誰様に随ふ心もなし。

兄半兵衛の存じられし事でなし。此文封の儘御返辨覺し切て下されと。男色たてぬく詞の優しさ其いきのたに猶なつむとしみしたるふ取廻せば。半兵衛見のね。聞分もないた。形こそ町人心は侍拙者が目利で惚人の内へ遣ませう。小七郎装束せいと心と目にて知らすれば。あつと心得點頭て部屋に入ば。半兵衛多くの文の上書讀み。ハナ昔おのくの名書此一括りの上書に。小一兵衛とは誰事御存じないと問ければ。三人共口と揃へ。其小一めは此郎の中間。慮外な下主めが。遣おつたのと似笑ふ。さうで御座らぬ此道に高下はない。其小一兵衛も呼出し并べて置て念者に頼む。さう下主め。身などと座に置奴でない。殊に留主やら顔も見す無用／＼と云ふ所へ。山脇小七郎白小袖に淺黄上下覺悟極て座につけば。半兵衛は取敢ず着だいの三方に抜身二口弟の前に置。惚手は四人ほれられては第一人。何方へ進せても殘る三人の恨み。此兄は他國住居行末も氣づひ。いやと云はさぬ御所望歴々のお侍。町人風情に手と下てのお頼みのつひさならず。弟に覺悟させての死装束表面斗りの戀幕でなく。未來までも小七郎不憫と思召すならば此場にて指違へ。人の構はぬ未來での念者若衆。弟とやる。何方なり共兄弟の契約／＼と三人と

睨付る。思ひがけなき扱身の盃。死装束に吃驚して。へんくんと咳に紛らし身せりし
くつと云ひ手もなかりけり。御門脇の長屋より紺のだいなし。裾七の圖まで引のらげ一ふ
りふつて振出すは。戀にこひとや小一兵衛二人の鼻の先尻つき出してうつつくばひ。兄御半
兵衛様のお手前も、お耻らしいべいながら。小七様にとんと打込み二合半のもり切おたひ。
咽につまつてぎつちくつてきないこんでこはりまする。今日君がお情をつん出して。未來
では拙者めとお念者になさるべいと有難いやら悲しいやら。きく唐がらし五ツ六ッの
ふつても。こんな熱い涙は出ませぬでこはりまするでこはりますると。白刃と取て立よれ
ば小七郎も引よせてすはやと見へし刀の中。半兵衛飛入り、狂氣したる小一兵衛と二人
と左右へ引分る。上方のお旦那精味増汁の御恩にへたお若衆。爰で死ねば心中が見
へませぬ。是非に死なせて下されと立上ると引伏せ。男氣見へた小七郎に誠の惚人はそち
一人。争ふ者が有てころ大事の弟と殺ふづれ。争ひ手のない若衆山脇半兵衛が挨拶。向後
兄ぶとに頼んだぞ、はつと悦び小一兵衛。お侍方と同座のならぬ奴めが。武士に劣らぬ魂
故。結構なお若衆様の兄様とは忝けない冥加ない。手付に一寸はてくるしい事御めん

く。半兵衛様も氣とお通しとべつたり抱きつき。紺のだいなし白むくに黒白推の兄弟な
り。岡軍右衛門はうのい怪氣くわつとせき。下郎め。見苦しい置かれと肩と取て引退れ
ば。コト何なさる、聞へたお取持の御酒が過たの。合點く流石二腰の御心がけは格
別。柔術の稽古遊ばすな。無調法ながらお相手と座敷にもてなし。すつと寄て一當めて引
うついてうんと投。へんくんとこりや鹿相でこりやまするでこはりますると空伴爲。甚藏逸
平堪られず一度に寄て胸ぐら掴み。ぞんざいなる小丁稚め朋輩となせ投た。返報に砂の
ちらせんと引立る。扱々お心がけのよい。お前方もこりや柔術のどりやお相手と立柏子。
二人が息合はつたくと蹴のへせば板敷より眞逆様、くくくくこりや又鹿相ゆめん
くと云ふとしは。三人ぐすく起上り、そんな所へ給仕に來て。酒もつて尻踏れたと
袴の腰の痛い顔。耐へてこそは歸りけれ。半兵衛ぞくく小氣味よく。扱も手際小一兵衛
。我は他國便なき弟が事頼む。今日の料理の御褒美に二人が事と旦那へ訴訟。權柄晴
て念比する其中立は半兵衛が。八百万代の神のけて結ぶ契ぞ

中之卷

五月雨はと戀慕はれて今は秋田のほとし水。軒の玉水とくくごされ繁くごされれば名の立に。玉水近き山城の村は上田に家富て。庄屋に並ぶ茅屋根も内温りに下女。並んでつむぐ綿車。手廻りもよくいくはへる庭に五つのたなつ物。積む蓬菜の島田氏。平右衛門と云ふ大百姓。妻は去年の秋霧ときへても残る娘二人。物籠輕に入婿と鳥飼より呼迎へ。妹千代も大坂にれつきとしたる婿とつて。身の入まひは上田の田島の世話とやさやめば。万事限りの俄病ひ姉のお輕は側離れず。臺所には女子共。なんと今朝のら仕事のはるもいたでない。些休まふ。お竹お鍋と呼つれて。思ひくりに立出る。親のすやく假寝の隙と窺ひ女房は。心忙く奥より立出で。是々臺所に人が獨もない。連合平六殿は淀川筋新田開の御訴訟に。大事の病人振捨ての京登り。男共は皆野へ行く。憎い女子共。我見る前であちよびのりして一寸立ば早何所へ。大切な主の煩ひ薬一ツ温めふ共せぬ。下々に何が成團爐裏の下焚付ぬ。次郎よくと呼廻す門の口。駕籠昇据て申々。大坂の新鞆八百屋伊右衛門様のらと。駕籠の戸明れば打淵れ目元しぼる、縮緬の。二重廻りの抱帯涙の色に染あへて。なくく出れば駕籠の者。借に御届け申したと言ひ捨歸るも足早なる。親の家さ

へ女氣の敷居も高く越のねて。佇立む有様姉の見つけ。ヤアお千代おとやつたの。定めて御病氣の見廻ならぬ。よふころく何故駕籠の衆留やらぬ。他外でもあるやうに客人がまし。酒一ツ進せて去しやいの。それ呼戻しやと言へ共妹の差俯む。欺けば共に歎のれて、道理く疾知らせんと思ひしに此病ひでの死なぬ。氣のとりにくい舅姑持たお千代。婿半兵衛も忙しい時分。聞たり共自由に来る事の成まい。案じさするも不便沙汰するなどの。病人の氣にもさあらぬれず。高麗橋の伯母様常盤町へも知らせぬ。氣遣しやんな京の御典藥に換てあらめつきり薬も廻り。今朝も粥と中がさに三よそひ。病の請取て愈すとのお醫者様の請合の本復もおなじ事。和女の顔御覽なされたらいよく父様の病ひのすつへり愈らふ。嬉しいくお目にのりやと有ければ。父様の頼ひの知らなんだく。何時のらの事でござんする。ヤ何じやお頼ひ知らぬ。そんなら和女何しに来た何悲しうて泣ぞ。耻のしや又去られてと顔押隠しむせび入る。姉も驚く顔に血と上げなふお千代。五度三度の聳入嫁入も世に有る慣ど云ひながら。悪い事の手本にならぬ耻のしいく。口で云ふ斗りが耻と知つたと言れふか和女もあるく三度の嫁入。尤始めの男道修町伏

見屋の太兵衛殿。心ふしやうに身体と持くづし。たゞすみもない様に成果あるぬ別れ。其次の死別れ互に難いなければ共。人の和女の辛抱がないゆへに。去られたくくと批難付。此度の嫁入も追出さるゝに間あるまい。忘れても嶋田平右衛門が娘の風下に居るなど。娘持た人々の寄合茶香吐にも和女の噂。ま一度戻つての親兄弟。人中へ顔が出されぬとい知りぬいて。火入骨と碎るゝとも歸るまい。必ず去られて戻るなど。念に念とつがふた今度の嫁入。よふ戻りやつた父様お聞なされたら。お悦びなされうどお顔見せる折が有ふ。必ず聲高に物しやんな。して半兵衛が暇の狀取て戻りやつた。いや跡の月半兵衛殿。父御の十七年の吊いの爲生れ故郷遠州の濱松へ。戻り次第道具に添暇の狀の跡を先去ねと譯も言はず。お腹に四月唯もない身と。姑御が手と取て駕籠に引ずりのせ。むごいつらいと計りにて歎くと見ればいたく敷。子のある物と夫の留主暇くれる姑心に一物有いの。伯母婿ながら和女の親分。高麗橋二丁目川崎屋源兵衛殿指置て直に爰へ突付る仕方も憎しよいく。此方の方が京からの歸りと待て詰開らせ容易で暇のとらぬ。とい言へ世上の夫婦中去るといふ事誰こしらへ。愛目とさせる可愛やと歎けばわつと泣出す聲。高

いゝ障子の那方火様の寝入ばな。泣なくと云ひつゝもつと涙の血筋としてしんの泣寄憐さよ。平右殿御氣色今日の如何とつゝと入る。おな玄村の金藏お千代のちやつと姉の影。見付られじと身と隠せば。隠れまい。只今堤の茶屋で大阪へ戻り駕籠の咄で聞たお千代殿目出度い去られて戻らしやつたげなど。口も氣儘のとはうなし。お輕いはつと余所よりも親の聞く耳憚りて。金藏様嗜ましやんせ。聲のなし聲低に言ふても濟こと千代の去られぬ致しませぬ。親の病氣と見廻のもどり奥に父様すやくと寝てござる目と醒して下さんすな。ひくうゝおなじくば去んで貰ひたいと。氣の毒がるはと猶聲高。親仁寢ての面白いなんぼ隠しても惜な事聞てゐます。お千代殿幾度でも去られさつしやれ。彼是の婿達が踏擴げた田地でも百姓の女房にの大事ない。おれが持て一夜さも淋しいめさせまい。去られて戻つた悲しいと氣とくさらし。必ず女房ぶり損ふて貰ふまい。去春貰ひのけた時おれが方へござればよいに。惚らつた一念他に足り留らぬ筈。居まいゝ戻ると云ふも此鼻に縁が深いあらじや。親仁殿に云ひ込で今日あらでも我ら請込む。姑御大事にのけて貰ひましよと喚けば。二人の死入斗り冷す心の奥に手と打。あるよゝゝ。あゝ

く。南無三親仁おさらされた。金藏が見廻ふたと云ふて下され。又明日御見廻申そふと
歸ればのるの腹も立。是々去すと千代とお貰ひなされぬ。いやく云ふても大事の縁組
。日と見て申し出そうとへらず口して立歸る。父様お目が醒たると姉が障子とあくる跡よ
り。千代もおづく指覗けば。夜着にもたれて起臥もなやみ苦しき老の坂。誰のりすと
なけれ共落くる肉に顔あれて。見のりす親の顔と顔堪のねてなふ父様。お薬わがつて今一
度達者になつて下さんせと。思ひず知らず聲立てさめく。歎き伏しまるふ。父も見る目に
涙ぐみ大事ないつと来い。つくと寄れと膝近く又去られて戻つたな。子に運ぶ親の心坐
乍千里万里も行く。況てや一ツ家の内寝ても寝られず。最前より何事も皆聞しぞ。るも我
ながら斯も心の變る物の。五十と云ふ年の内の行歩心に任せずながら。心の若のりし昔に
變らず氣も強く義理にも引れ。おのれ重ねてさられたら顔も見るまじ。物云ふまじとの
我もありしが六十に足踏込でと。年斗りよるでなく月もより日もよつて。病ひにのらま
るゝ身のおとろふる程。彌増に按じらるゝ子の身の上。三度のなるる百度千度去られて
も。去らるゝに定まりし前世の約束と思ひあきらむれば。悔みもせぬ憎ふもない笑ふ入

笑ひもせよ。譏らばそしれ指もさせ。子の不憫さへのぬぞと老の縁言息よのり。半兵衛
めの遠州へうせて留主の内とな。其留主合點。万一うせたりとも物云ふな顔も見な。彼奴
が身上百倍の所へ嫁入させる。苦に持て煩ふな喃姉下々の野へいつつらん。茶わのいて千
代めに中食させてたもれやと。餘念なき父の顔姉の悦びコレお千代。案じた父様の御機嫌
日本一。お側はなれず介抱申しや。嬉しや胸が開けたと障子と引立く。勝手へ出る。折
こそあれ門に物もう頼みませう。何方とこたへ入と見れば千代が夫の半兵衛。扱こそ縁と
切に來たと思ふ心に口どまくれ。去状さまよふ御座つたと。云へどもなんの氣も附ず。旅
出立の儘笠取て沓ぬぎに草鞋の紐。心も解ておあるさま何方も變る事あるまい。國元へ參
る時分の事急にて報知もいたさず。氣のつゝぬ親共留主の内にも無御無沙汰。拙者も無事
に遠州より唯今罷り歸ります。フウそれいなゆきとこによふお歸りなさると。顔と背けて
鼻あしらひ。男ども女子ども誰ぞお茶でもわけぬると。内にいぬ人呼立てむやくし顔の色
合と。見て取ながら半兵衛立も立れず仔細の知らず。互の心隔ての障子さつとわけ。姉さ
まお藥温めてと出るの女房。ヤアお千代爰に居るのと。聞捨て物とも云はず直と入り障子

とはたと引立たり。おる様あれ女房。いつら愛に何故物の申さぬと騒げども。物云の
 ぬ譯聞たくば此方の心にお問なされ。人の知つた事の様。く可笑い事であるとき空笑
 ひ取てもつられず。ムウムウと計り差伏むさむねつくりより詞なし。奥に親のせぐるし
 聲。夜短らで日の永い老人の身によけれど。それも息才で駈まいる時の事。病はうけ
 て日の永い扱々退屈で暮し兼る。千代よ棚な本おろして何なり共讀で聞せ。ある何所
 に来て聞ぬ。我伽せぬうせぬと忙しく老の氣のいらだて。あいつ愛に仕事しながら
 ら障子隔て、聞まずと。流石半兵衛と捨ても立れず障子の傍に立よれば。親仁様御病氣
 容体見たしと云んとせしが不待遇なる氣をうねて。詞と留め折と待共に摺寄り聞わたる。
 千代の數多の本取出し伊勢物語ぢんうさ。父様の傍に有まい綱島の心中もござんする。
 つれづれ平家物語なふ父様何の本が能らふぞ。姉が讀さいた平家物語祇王が段と聞ふ讀や
 れ。誠に紙と付た所があるぞ押開き。母の刀自なくく又教訓しける。天が下に住ん者
 兎も角も入道の仰せの背くまじき事有ぞ。千年万年と契るとも順て別る、中も有。あ
 らさまとの思へ共ながらへはつる事もあり。世に定めなき物の男女の慣なり。はんにそ

うじやと讀さして。我身に當る愛涙留め兼てど泣わたる。父も不憫に目とまばく。昔も
 今も人の氣の移り易き世上の慣。コレ姉もさけ。平家物語と千代が身に引較べて云ふ時の
 。清盛入道の八百屋半兵衛。祇王の千代が身の上よ。その清盛が心變つて追出す。憎や清
 盛。去年婿入せし折ら不調法な娘と進上致した。氣に入らぬ事あらば打毆き縛り括ても
 直させ。未々までも見捨す添て下されし。此度共に三度の嫁入。在所の一ッ所どころに
 て。又歸つて平右衛門二度人中へ頼が出されぬ。娘の氣に入らず共我と不便と。面倒見
 て必ず去て給るな。オ、去まいく御臨終の折ら前奥の平六殿。後奥の此半兵衛眞
 實の子と持たと思召せ。今こそ町人八百屋の半兵衛。元の遠州濱松にて山脇三左衛門が倅武
 士名利商賣名利。千代の去ぬ氣遣するな。ア、忝ないと手と束ね。地頭代官の其外に一生
 下ぬ頭と下し互の契約。物忘れする老の身にも其時の嬉しさの骨身に染て忘れぬ物。若い
 形して忘れし忘れぬ証據。其身の實父の用ひにこのつけ遠州へ出のし。其跡で姑に
 追出させ養子の親に我がつみと塗付る不孝者。義理も法も知た奴の彼が何の武士の果。鯉
 節の削り屑人になしめに縁組であたら娘と捨たな。ろくに吟味も爲なんだと死んだ母が

彼世のら。恨み召れよ口惜いと慎み深き堅親仁。悪口交の口説泣二人の娘も正だ涙。兎
 ろく男に縁のない生れじやうのと斗りにて。聲も惜まず泣居たる。扱は女房去られて爰へ
 戻つたのと。始めて驚く半兵衛胸に磐石据たる如く。呆れ返つて涙も出ず暫時詞もなかり
 しが、情ない女房。假令一言一宿のつき合にも人の心を知る、物況て足りけ二年の馴染。
 子までなしたる夫の心知ても言譯してくれぬ。親仁様の御立腹申し開く知つたれ共。
 我罪と養親に塗付る不孝者との一言のら。もめく存せぬ我ら去りの致さぬと申し登
 る程不孝の上塗。親仁様につがひし詞違へぬ武士の性根と見せる。見て疑ひとはれ玉へと支
 ばと引ぬく脇差より。おゐるは早く廻り付く千代も驚きなふ悲しや。こな様に恨みのない
 と障子引わけ走りより。留ても留らぬ男の力父様頼み上ますと。騒げど騒がぬ平右衛門。
 お身が居るとは知つての當事耳にとまつての自害の。よい分別。自害して死んだらばあ
 れ見よ八百屋伊右衛門夫婦。嫁と憎んで去りしゆへ子につらうちに自害せしと。養子に悪
 名難と付口々に取沙汰せば手がら。留るな娘ぞんぶんに自害めされ。見物せんとの一
 言に孝心深き肝とひしがれ。さうじや過つた眞平と頼と擦付身と悔み。然らば御暇千代

も同道いさお立やれ。キやつはり私と女房は持つて下さんする。假令死んでも身体も戻さ
 ぬ。ぢん未來まで女夫。そ、忝い父様姉さまも悦んで下さんせと。はや締直す抱帯とさ
 とたぐつてにじりより。父のはら。涙にむせび。半兵衛は見や此しをなさ。歸らんと云
 ふ嬉しさに親の病ひと何共云はず。悦ぶ顔と見る親の内の心の嬉しさと。叶は。見せて禮
 云たし。取締のない愚者伊右殿夫婦の氣に成まい。頼む其許の心一ツ親の老病明日知
 らず。黄泉の底のこそ迄も心にのる千代一人。明日が日眼塞ぐとも姉夫婦にさつと云
 付。十廿の金の取やりいつ何時でも事缺せぬ。随分商賣手擴くして娘が事と頼み入る。契
 約の盃せん銚子。姉よ酒とさらせし親子の中に遠慮のない。酒と思ふ心が酒燗鍋
 に水持てこいと。盃の出る間もこがる、子故の間。引うけ。すつと乾し。半兵衛差ふ
 親子夫婦が水盃さいつさ。れつ涙も盡す飲ども酔ぬ水酒盛不憫と思ふ親の氣の余りて
 色に出にける。命があらば又逢はふ死なば親子の末期の水。未來の八功德地の水此世に思
 ひ置事ない。二人ながらおいにやれ。去らばと夜着に打もたれ二度詞もあられぬ。
 親の心に身と耻て姉につぎ。云ひのし。思ひと陳て立出る暫時と父の起上り。姉なふ

重ねて戻らぬため。祝て内で門火たけ。思しいと思へども親に従ふ焚火の煙。目出度ふ爰のら焚ますと。庭にこがる下萌の。果の夫婦が無常のけふり。灰に成ても歸るなと其一言と此世の名残。留る名残行く名残長き名残と

下之巻

夏も来て青物見世に水あわく。蕙庇に除られし日影の千代が舅の家の新うつば油のけ町八百屋伊右衛門。浄土宗の願人了海坊の談義に打込。開帳廻向の世話や仲間。見世の半兵衛に打任せ大坂中の寺狂ひ。女房内外の世話に五ツも年ふけて。朝のら晩迄氣の苛だで。此半兵衛の藏にべらへ何して居やる。見世の賣物がしなびる。松めきりへと水打ある。ヨネさんよ。のりあい物がひあがるがな。とりへてたんで打盤出してちよきくとうて。其ちよきくで夕飯のおねばささめ。ヨネ松よ。今日の五日宵庚申甲子が近い。二また大根のけておけしさんよ茶釜の下が燃出ると。商賣が八百屋とて八百色程言付る。口せりへと忙しき大晦日の生れるや。伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ。はしりの竹の子片荷に猶活生姜青山椒白瓜二ツ。これの扱も早い事でごんすよの。おれが戻るにて

も遅い事でごんすよの。ヨネのらつば。今朝卯の刻あら内と出て。何時じやと思ふ盡下り。そこで鼻毛とよまれて居た。旦那しもの注文もの日覆してさへ傷む時。高い物とてんとぼし商賣のおうこくらにせ魂に覺へさせんと取付ば。半兵衛走りいで母者人のがこりや尤コレ太兵衛。何處にのらへやつて居た。おくび町の笹屋のら竹の子取に矢の使ひ。阿波座堀の丹波屋のら栗おこせと云ふてくる。朝倉屋のら青山椒内にはされる返事に困つた。太義ながら母者人の機嫌なとし。つい一走り廻つておじや。私じやとて何の悪ひ所に這入て居ましょ。横町の山城屋のら呼こまれ二ツ三ツ咄したばあり。其も外の事とてさうぬ此方に誰やら逢たいとて。今朝のら爰に待て居るといふてくれとの傳言。私や花主と廻つてこう此方も一寸往しれと。注文物と取崩へ荷拵へして出ておく。半兵衛の山城屋と聞よりお千代が來たである。氣どられまいと空とぼけ。山城屋のら何の用とて一寸いでふと。はしり出るとむすと執へ息子のこりやとこへ。やましろる屋のら逢たいと。その山城屋合點なりませぬ。つねつけりとした顔のいの。こちと夫婦の何にも知らぬと思ふての。氣にいらいで去なした嫁。遠州戻りに在所へより能くへて戻つたな。常盤

町の従弟が所に預けておき。商賣に假托間がな隙のな女夫こつてり。おれが知らいでおこ
ろいの嘸おれが事識りやつゝろ。十五年世話にした親の嫌ふ女房に。随分と孝行つくし親
には不孝つくしや。思知らずめと疊たゝいて喚き居る所へ。青布子の西念坊案内なしにす
つと通り。熊野屋の權右様より先達てのお約束。宗味が石のねのいげん鹿相な非時致し
ます。講中皆お揃ひ旦那寺もとふお出で。御夫婦ながら唯今と。云ひ捨歸るゝくさ坊主
未來頼むいあぶな者。親仁殿。熊野屋より呼に來た早よ往のしやれかりや往ぬ。さき
くさしやれとつこうと聲。親伊右衛門の後生一へん。女房何と驚しい。又たしてもく
。半兵衛さへ見れば敵の様にいふ人じや世間する若い者呼に來まい物でもない。少々の事
の聞のがしにしやいの。其結構過たのら親と阿呆にしるわいの。現在おれが甥の本兵衛
と差置さ。あらの他人の此のら殿に家邸遣る此母邪の少もない。女房。それ誰も知
つた事今更調へる事のいの。そのよな腹のたつ時の念佛が藥じや。兎角如來の御方便修羅
燃す和女と。呼に來るも彌陀如來參る此方連も彌陀如來機嫌直しやと宥むれば。イヤこちら夫
婦が出てゐて跡へお千代と呼入れ。留主の間ではたへさす事は成ませぬ此方一人參つて。

私は俄に目が舞たと成と頓死した成と間に合に遣つしやれ。又房たつた今西念坊が見て
去だいの。此伊右衛門に虚つけの、勿体ない妄語界。此中さるお寺で五戒の割口説聽聞
した。三百戒五百戒も約る所り赤貝に留るとのお談義。半兵衛が叱るゝも貝のわざ。和女
に已が意見するも貝のわざ。一遣託生の聞のお同行とじやれて機嫌と取ければ。そんなら
此方參らしやれ。此様な嗔恚の燃る時に念佛申せば。咽にすくく立やうな心鎮めて跡
のら參らよ。のてくくへてあたどんな念佛講。こんな時のめり聞して延したがい
いの。ほんに〜此方の同行に氣轉の利たがヒツとりもないと。恐いめ知らぬ我儘たら
〜。そんなら先へ行く跡のらおじや。佛法とややくの雨の出て聞と。外へ出れば又有
難い事も聞。此度生玉大法事の開帳に築山と飾られたも。筑後の川中島の四段目のら出た
事じやげな。こんな事も出にや聞れぬ。有難い南無阿彌陀佛とわ珠數くり〜出にけり
。半兵衛一言の答もせず涙にくれて居たりしが顔ふり上。申し母者人。今めあしい申事な
から。武士の釜の水で育ちし此半兵衛。廿二年のら面倒に預り。一人の甥御と差置家
邸商賣とも。私へお譲りなさるゝ御厚恩。肝にこたへて空にも存せぬ。御恩の母の氣に入

らぬ女房なれば。私が離別致してこそ孝行も立世間もたつ。所に此度國元の留主の間に。八百屋半兵衛が母が嫁と憎んで姑去りにしたと沙汰あつてい。まんく千代めが悪いになされませ。はうぐいん最負の世の中お前の名は出ませぬ。母の悪名と立て若い者の人中へ頬が出されませうの。親仁様にも面目失ひする爰が一ツの御訴訟。少の間と思召し虫と殺し。美しう千代めとお入なされ其上にて私が。物の見事に去状書て暇やります。こが男のひうけん。貴人高位の娘でも夫が去るになんと申と。時に千代めが姑への恨みもなく。お前と慈悲じやと云ひせたい。十六年此方たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中警私が先だつても。如何なる跡のとひ弔ひ百万遍の御回向より。聞入れたとの御一言。智識長老のお十念と授る心と斗りにて。女房の親と我親と世間の義理と恩愛と。三すぢ四すぢの涙の糸たぐり出すがごとくなり。母はいやうと笑顔して、思ひ合た夫婦合。誠らしうの思ひねを虚に涙の出ぬ物。眞實去るがぢやうじやの。お前とだます程なれば此御訴訟ば申しませぬ。嬉しうく巳も鬼にはなりとむない。必ず去りや、間に合言て欺しやれば。こ此母が咽笛と出刃庖丁でちよいじやぞや。母殺すの女房去の夫ら其方の勝手次第。さらりと穢土の苦が脱た。此世のらの生佛といおれが事。足輕ふ非時に参りましょ。こちや未來までのさざりせぬ閨の同行が。さころ待や焦れて南無阿彌陀佛く。さんよ其姿でつい供せい。南無阿彌陀。松よ。又見世のつるし喰ふな。なまみだ。南無阿彌陀佛に取ませてふつくと云ふてぞ出にける。お千代が重なる五ツ月の重き身ながら。足元も手もろくど帯の下。小襦引あげちよとく走り。久し振で家と見た半兵衛様。今日といふ今日町内廣ふ戻たいの。嬉しやと抱つけば。半兵衛ぎよつとし何として戻た。たつた今母が出られた道で逢ひいせみんだの。さればいの。母様の山城屋へよろしやんして。いつにない門口のらにこくと。いとしゃくれば些の思ひ違ひで苦勞させた。今のらいなそのいのじも云ふまいと心誓文たてた。娘の持す天にも地にもたつた一人の花嫁。末期の水取る、も骨拾わる、も和女。随分孝行にしてたも和女もおれがいとしかる。今お念佛に参る其内に早ふ戻つて。後に逢ふ早うくと頼と桶な物打あけた様なお心。皆此方様の云ひなしもへと。はんに男の御恩の戴いて居てもあきない。松よ久しいな。最早どこも蚊があるに。女房主人がなければ未だ蚊帳の釣手もなし。んさんが居眠りでい

拾遺もの洗濯もできまい。此戸棚のはこりいの奥の疵もまた塞す。あうの物も見廻たし何のらせうやら氣がうるつく。居つけた所に居て見よとんと坐りし茶釜のまへ。湯と沸して水になる未知らぬこそ果敢なけれ。半兵衛兎角の挨拶せず。ヨシ松よ。只のすとも藏へぬて椎茸よれと人のけ。お千代の顔とつくくを見て涙ぐみ。エ、可哀や利發なやうでも女心。母の詞と眞實と思ふ。云やる事が皆虚じや。然りながら昨日もくれくいふ通り。佛法の端も聞入れ物の慈悲も知つた人。我甥とさしのけ他人の身共に。跡式譲る心の根の根の根がまぬ是証據。人への相縁奇縁血と分た親子でも中の悪いが有る物。乗合舟の見ず知らずにも。可愛らしいと思ふ人もある。人界の習慣斯した物いとしはなげに根の悪人でもない母と。和女故に邪見者とさせては女夫の者が後生も悪い。母の機嫌よふ一たん呼び返し。改めて己が手のら去る筈じや。エ、イすりやとふでも去らるゝの。肝潰すことこのいの死るゝ二人が豫ての覺悟。養ひ親にさんもつゝす在所の親の意恨もなくエ、流石じや。見事お死んだと未練者の名と取まひ爲。母に向ひなんぼの詞と盡したと思やると。書置も認め死装束脇差もあらめの荷へ捲込み。此世の心がゝりは微塵程もなければ

も。金に語つて死ぬる心中と一口に言れふのと。是が一ツの氣がゝりとわつと泣ばわつと泣。こなさんの孝行の道さへ立ば私も心は残らぬと。夫婦手と取紐寄り伏し沈むこそ道理なれ。母は念佛の回向より嫁女夫の願意此功德氣がゝり。余所にゆるりと居る空も見世鎖比によつと歸り。なふれ千代戻りやつたのさつさにも云ふ通り。些どしたりやうげ違ひで物思はせたいとしやの。はんの生如來が見たくばおれじやと思や。永うもない淨世に融いつらいめ見て何にせう喃否やの。ヨシ半兵衛。はしりの出又庖丁よふ磨して置たぞや。ちよいと觸つても劔じやぞ。ア南無阿彌陀佛くと半兵衛に合圖の詞。嫁は知ぬと思ひこむ是ばつゝのり佛なり。女夫の母の機嫌顔見れば此世の本望と。思へどじやくの雨とふる。涙隠すぞ哀れなる。ヨシ半兵衛何も忘れたとない。日の永い時は得て物忘れするものじやよふ思ひ出しや。れ千代泣すと爰へおじやいの。未己が恐いの爰へくと猫撫ぞえ。ア、くお側へ参りますと。立寄んとする所と半兵衛取て突退。女房斗りの親の儘にもならぬ。身が氣に入らぬ去たく出てうせい。ヨシさんも丁稚も能聞け。半兵衛が女房去たぞ。向ひ隣町内でも母の淨名と立たれば聞事でない。うろくせずと出てうせいと眞顔に睨む目に

涙。嫁御ありや去ぬぞや。親の儘にもならぬは女夫是非がない。おれと恨みと思やるなと云へども。何の返答も泣入くしやくり泣。其涙はまだ母に恨みが有さうな。有なら言や聞ませう。お慈悲深い姑御に。何のくと斗りにてうつはと伏して泣居たり。おのれが云ふまでない母者人に何の恨み。口手間入れる面倒なと小腕取て門口に。引出す此身も終に行く後にくと嘸きて。目ませに宿の名残の涙。弱る心と見られじと門口つしやり見世ぐはつたり。鳴るは六ッおはや初夜の時もじぶんも六々に。胸はわけなき五々八々血死期近づくと斗りなり。あゝぬ夫婦の生別れ流石の母も挨拶なく。おうゑと立て奥の間の罪はるぼしの鐘の聲。善悪照す御燈の火と見るよりも居眠る下女。外に見る目も荒布の束中に隠せし一尺四寸。是が冥途の案内者魂こむる書置箱。地獄へ落るる極樂の末は白茶の死装束。くるく包む毛氈もはや紅の血と見れば。死損いはせまいぞと一心のすはれ共。暖簾一重彼方おはすゝと母の鐘の聲。胸にこたへて身も慄ひ踏所覺へぬ差足に。卸外す手もわなく密と出たる門口に。イヤアお千代。おいの。サア鱈の口と脱れたサアおじやと手と引ば。マ待て下さんせ生中一度戻つて。此方様の口から退ぞ去ぞと言れ

ては未來迄の氣掛。此門口で唯一言去ぬと云て下さんせ。愚痴な事斗り今宵は五日宵庚申。夫婦連で此家と去ると思へば能わいの。ほんにそうじや手と取て此世と去る。輪廻と去る迷と去る。今日は最期の羊の歩足に任せて

道行思ひの短夜

名残も夏の薄衣驚の巢に育てられ子で子にならぬ杜鵑。我も二人の年月と養親に育てられ。子で子にならず振捨て死に行く身は人ならぬ。死出の田長の杜鵑同じたぐひの夫婦連。肩に掛たる毛氈は啼く音血とはく委のや。覺悟極し足元も影はのぐらき薄曇。卯月五日の宵庚申死ば一所と契りたる。其一言は庚申参りの人に打紛れ。忍び出るも商賣の八百屋万と一文字に。半兵衛と云ふ名にも似ず。唯ねぶのくも思ひつむわんな心の突詰て詞の義理にはじらみや。智者は感ず勇者は恐れぬ生れ付流石は武士の胤ぞのし。千代も今度が三度目の嫁菜盛りも古くれて。諸事と細なけしおらし人の云ふ事さくらげや。夫の親と手にさげ晝夜孝行つくつくし。仰せ背のぬ給仕へ。氣のとつさのな姑にせりく弄りたであら。命もなしやありのみの谷川ぶりに身と投ふ。今日あまのりに成ふると心はうちやうの

なんてんの。いつかつさびとしもせねば期なるはずでござんせう。何としようかの身の果と
 云て返らぬ水ぶきの。姑去で殺したと悪名つけて世の人のわらびませうがお笑止と。悔
 めば夫はすいきの涙。なふ和女さへ其如く悔んで給るに此半兵衛。年比日比の御厚恩送ら
 で死ぬるは人のくす。罰とのぶらん恐ろしとはうづき程な血の涙。はら／＼溢せば走り寄
 り。私も病者な父様と先と送るがじゆんさいと。却つて愛目見せまする。是も何也へ相生
 の松だけへと抱きつき。木末に知ぬ松の露落て松露になりやせん。彼一群に聲高く下向
 の衆のぞめき歌。見付られじと影隠す。我が懸路はいとなき三味よなんのねもせで待明す
 。それじや／＼見れば思ひの雲の帯／＼。さすぞ盃ならづと一ツまいれ。否とおしやる
 に。こちやも。それじや／＼そうさんせそれじや／＼。しるもよこの情盛にちよさり
 こつさり小およぼの。腰もしなへてやつくるり。くるりや／＼やつくるりど。ぬめらしや
 んすは二人がほゝに名取川。ア、それ二人と二人が名取川それじや／＼。それ行過しと立出
 て。今の小歌の一節に二人と二人が名取川。ア、それぞれじやと謠ひしは己と和女が名取川
 。辻占が能い此方へと勇むは男の矢竹心。ア、嬉しいと引連れて共に急ぐは女氣の。情するど

に人絶て物しん／＼たる寺町と。死に行く身も暫くは爰生玉の馬場先に法界無縁の勸進所
 。無明能化の門前に念佛と便り送り寄る。なふお千代。しんすいばんきやうでんと聞く時
 は心は境界に従つて轉じ變る。和女も千代と云ふ名と楓樂良訓信女と改め。我も八百屋半
 兵衛と露秋禪定門と改め。息のある内より早無き人の數に入れは。死後の身体の置所も俗
 縁と離れ。寺の庭でと思へども門開るねば力なし。爰は奈良の東大寺大佛殿の勸進所。先
 年了海和尚衆生濟度の説法と此所にて説始め。今遷化の後迄も我親は講中の第一にて由緒
 ある所なれば。最期と爰と思ひ寄る但望も有りやと問ば。なふ死ぬる身に何の望み。水の
 中火の中でも先の世迄も此方様と夫婦になつて居る所と。見立て死で下さんせとさめ／＼
 歎けば。ア、過分な。此書置にも書く通り養子に成て十六年此方。十方旦那の機嫌と取り暇
 ある日には町中と振賣し。元は僅の八百屋店今では人に少々の金貸す様に儲け溜ても。愛
 い目斗りに日と半日心と仲す事もなく。死なふとせしも以上五度。恨みある中にも和女に
 縁組切ての愛と晴せしに。それさへ添れぬ様になり死ぬる身に迄成り下る。由ない者に連
 添て半兵衛が身の因果。和女迄にふるまひ在所の親仁姉御にも悲い事と聞すと思へば。此

胸に鏢とのけ肝と猛火でいる様な。口惜いと拳と握り膝に押付身と慄し。涙はらく朝露につれて流る、斗りなり。あれ又愚痴な事斗り。在所の父様姉様は此方様より諦めよい。水盃の其上に門火迄焚れしは。生て再度戻ると私に意見の暇乞。其愚痴な事いふ手間で早ふ殺して下さんせ。てくく三方四方に半鐘がなる鐘が鳴る。人の來ぬ間に來ぬ間にと急ぐ最期の玉のづら。夫にまとい泣沈む。それよ、由なき悔み。最早互に親の事兄弟の事言出すまい。必ず和女言出しやんな卒此方へと毛氈と土に打敷。なふれ千代。此毛氈と毛氈と思われ。二人が一所に法の花紅の蓮と観ずれば一蓮託生頼みあり。親兄弟への書置も此狀箱に入れ置ば明日は早々届くべし。観念最期の念佛怠りやるな。今が最期とすばと扱く一尺四寸親重代。我身と切れとて譲はせじ甲斐なき半兵衛が身の果やと。昔思へば手も慄ひ不覺の涙堰あへず。心覺への西向に千代は合掌手と合せ。光明遍照十方世界念佛衆生接取不捨。南無阿彌陀佛彌陀佛の聲より早く引寄て脇差咽に押當る。なふ待てたべ待しやんせと身とすりのけは半兵衛。待てとは未練な。刃物と見て俄に命惜なつたの卑怯者めと睨付れば。いや、未練も卑怯も出ぬ今の回向は我身の回向。可愛やれ腹に五

ツ月の男の女の知ねども此子の回向して遣たい。嬉しや息災で産たらば何様して育てふ斯ふせふと案じ置は皆空事。目の目も見せず殺すのと思へば可愛ござんすと。あつはと伏して泣入れば男も聲とすり上げ。已も何の忘ふぞ若言出したら和女の泣やらふ悲しさに。黙つて居つと斗りにて一度にわつと聲とあげ前後正体泣叫ぶ。かのも翼と並べながら人の最期と急ぐなる八聲の鳥も告渡れば。夜明に間がない。明日は未來で添ものど別は暫しの此世の名残。十念逼つて一念の聲諸共にぐつと刺す。咽のこさうも亂る、又思ひ切ても四苦八苦手足と腕と身と腕と。卯月六日の朝露の草には置で毛氈の上に無き名と留めたり。年は三九の群内縋血汐に染て紅の衣服に姿搔。膾の妻の抱帯とニツに押切り諸肌脱で我と我。鳩尾と膈の二所うんと締て引く、脇差逆手に取持て二首の辭世に斯斗り。古へと捨ばや義理も思ふまじ朽ても消へぬ名こそ惜しけれ。はるくと濱松風にもまれ来て涙に洗む、んざの聲。三國一しや我は佛に成ります。しやんと左手の腹に突立て右手へくはらりと引廻し。返す又に笛掻切り此世の縁切る息引切る。晨鐘過の勸進所目すり、門番が見付て。心中、心中死んだ、と呼はる聲。吹傳へたる濱松風枝となら

さぬ君が代に。比類稀なる死姿語りて感ずる斗りなり。

宵庚申終

明治廿四年三月七日卯比刷版（中宮庚申）
同 年二月九日出 版（中宮庚申）

◎（定價金七錢）◎

發行 者 早 矢 仕 民 治

神田區宮本町五番地

印刷 者 松 本 秋 齋

本郷區湯島壹丁目拾三番地

發 兌 元 丸 善 書 店

日本橋通三丁目

全 武 藏 屋 叢 書 閣

神田區宮本町五番地

賣 捌 書 肆

- | | | | | | |
|---------|-------|---------|------|-----|------|
| 神田南神保町 | 松江堂 | 神田區表神保町 | 中西屋 | 京 都 | 大黒屋 |
| 神田沿集館内 | 黒雲堂 | 日本橋通一丁目 | 大倉書店 | 同 | 便利堂 |
| 神田表神保町 | 上田屋支店 | 本郷區元富士町 | 盛春堂 | 大 坂 | 丸屋書店 |
| 京橋彌左衛門町 | 巖々堂 | 本郷四丁目 | 文壽堂 | 大 坂 | 博聞分社 |
| 京橋尾張町 | 東海堂 | 神田錦町一丁目 | 武藏屋 | 神 戶 | 久榮堂 |
| 芝南佐久間町 | 栗ばら | 横 濱 | 丸屋書店 | | |

○故近松門左衛門作淨瑠璃本既刊書目

一出世景清	貞享三年二月初興行	興行年月は聲曲類纂に依る	每冊定價七錢 郵税二錢
一天智天皇	元錄二年三月初興行		廿三年十一月再版
一百日會我	元錄三年三月初興行		二十三年五月三版
一蟬	元錄十年十月初興行		二十三年五月三版
一最明寺殿百人上薦丸	元錄十四年五月初興行	○此符號と合卷	二十三年十月出版
一心中重井筒	元錄十六年三月初興行	◎此符號と合卷	廿三年十一月出版
一傾城反魂香	寶永元年四月初興行	△此符號と合卷	二十三年十月再版
一戀八卦柱曆	寶永二年八月初興行		再板近刻
一今宮の心中	寶永三年九月初興行		廿三年十一月三版
一吉野都女楠	寶永七年正月初興行	◎	廿三年十一月出版
一國性爺合戦	正徳元年九月初興行		二十三年九月出版
一日本振袖始	正徳二年七月初興行	△	二十三年十月再版
一雙生三國志	享保五年十二月初興行		二十四年一月出版
一心宵庚申	享保三年二月初興行		二十三年八月再版
一關八洲繫馬	享保四年二月初興行		二十三年五月再版
一伊達染手綱	享保五年八月初興行		二十四年二月出版
	享保七年四月初興行		二十四年二月出版
	享保九年正月初興行		二十四年一月再版
	享保十七年六月初興行	○但ゞ遺稿トアリ	二十三年十月出版

○諸名家戯曲傑作

一太平記	近松門左衛門添削 竹田出雲松田和吉作	享保八年二月初興行	每冊定價八錢 郵税二錢
一綱目			廿三年十二月出版
一心中ニッ腹帯	紀海音作 合卷	享保七年四月初興行	二十四年二月出版
一未廣十二段	紀海音作	元錄十五年八月初興行	二十四年二月出版

○浮世草子

一好色五人女	井原西鶴作	貞享三年開版	廿四年一月再版
一好色一代男	井原西鶴作	元和二年開版	廿四年二月出版

右之外古書類續々出版可仕候に付何卒御愛讀被下度候

發行所

神田宮本町五番地

叢書閣

故井原西鶴作

再版 好色五人女

全五卷 合本一冊

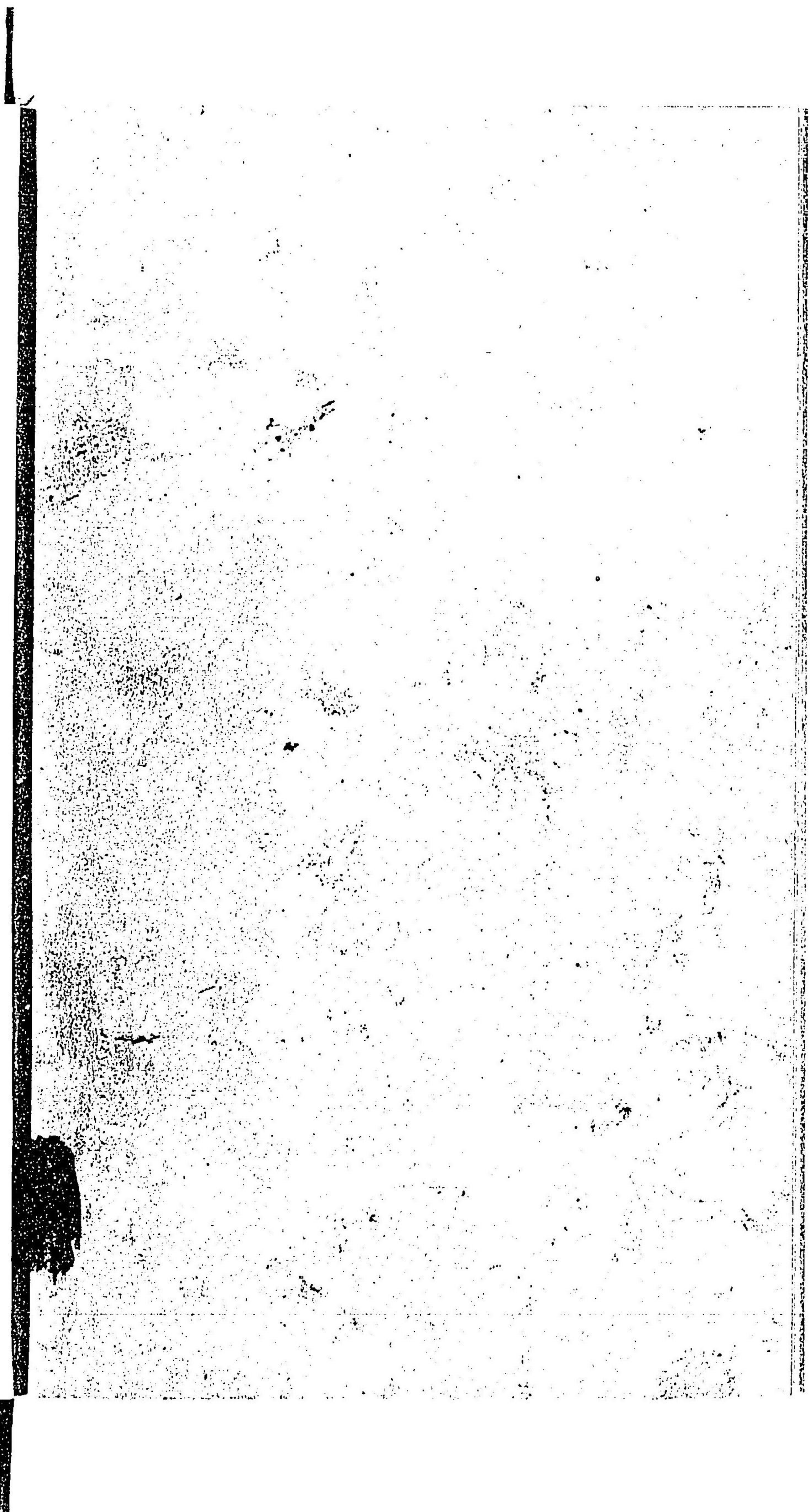
定價十二錢 郵税二錢

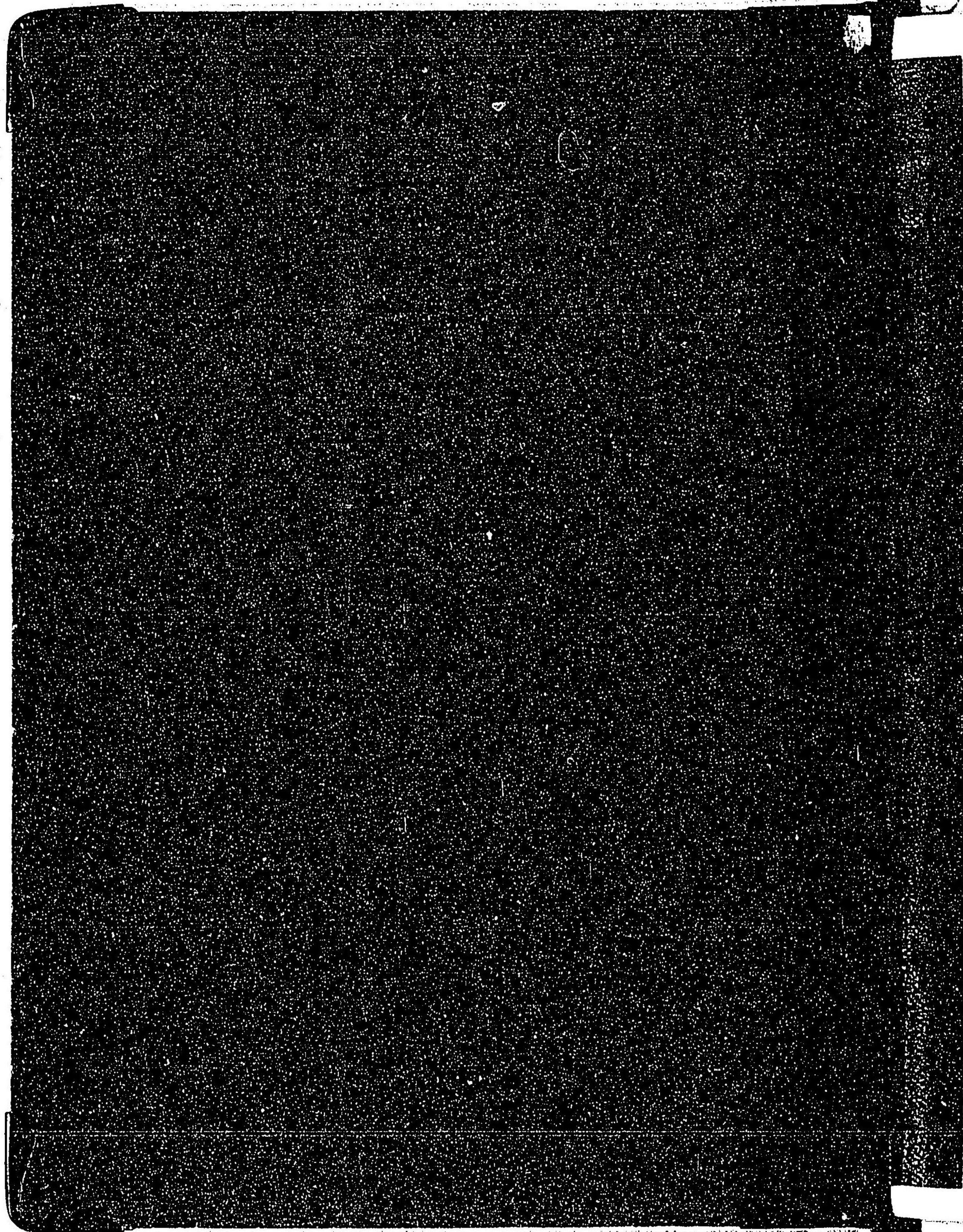
批評 「國會」 或る一部の小説家が六韜三略の巻段に有難がる西鶴翁の好色五人女は西洋紙活版摺に衣裳と改めて明治の世に再生せり原本にあらざれば硝子と隔て美人と物いひ交す心地すなき云ふ人は兎もわれ未だ五人女に接せざる者は一たび之と讀んで其氣前と知るも可なり

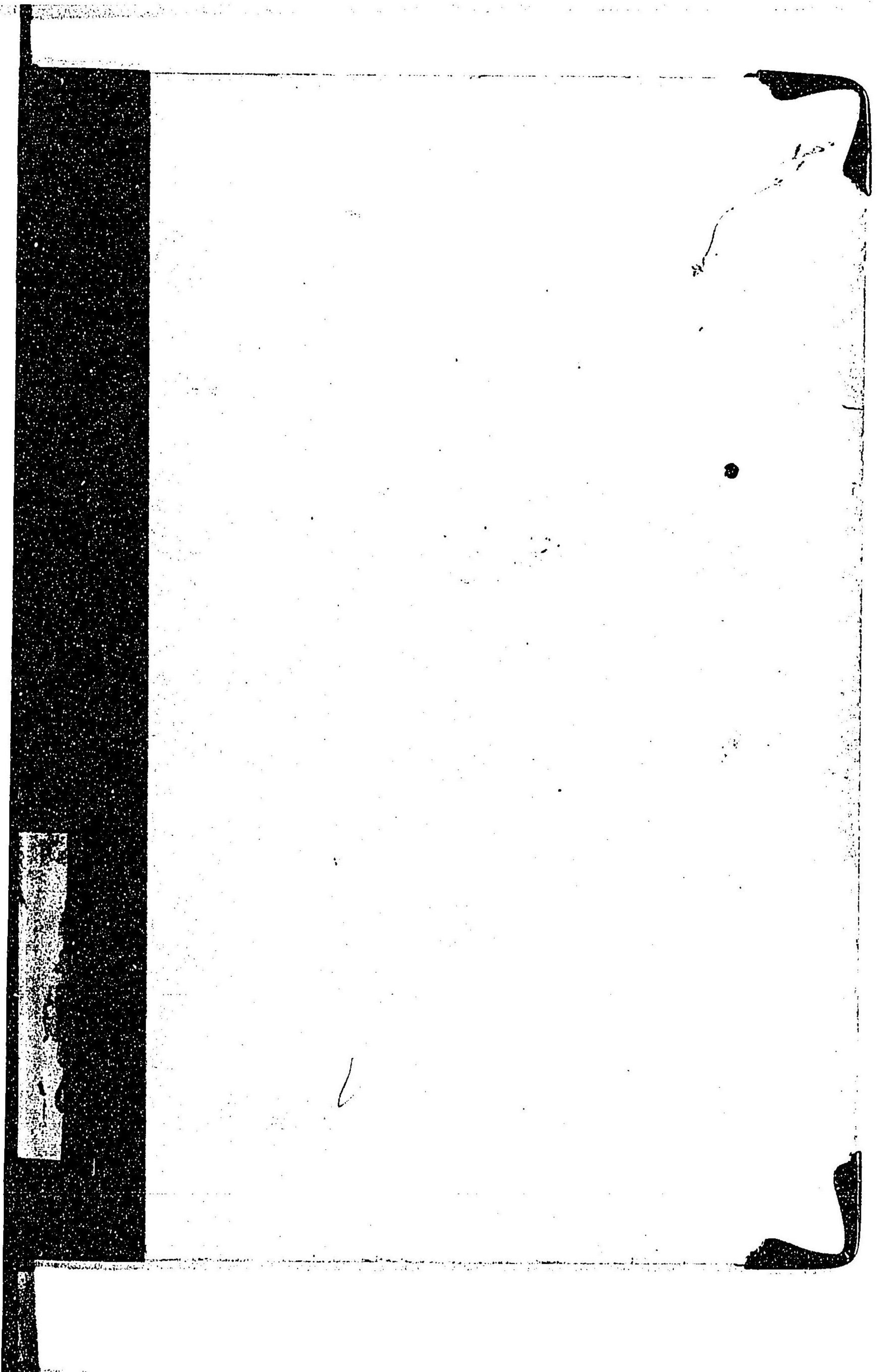
「國民之友」 好色風の小説やうやく盛んならんとす今や西鶴の好色本續々翻刻せられんとす小説家または批評家の中に西鶴と讚美して措る者出で來れり彼は實に此れの結果なりとす西鶴の想像は身近なり其文字は亂雜なり其取るべき所は只活眼のみ然るに今や人々妄りに彼と讚歎するに雷同せんとす本書の出版人分疏して曰く「社會は常あ人と作る」と此語として眞箇の格言ならしめ、西鶴の今日に再生せる者豈亦故ならんや、豈また故ならんや

「東雲新聞」 井原西鶴の名久しく本函の底に埋もれて知る人もなきまでになり果しが近頃其の著ともて難す者續々と現はれ明治の文學社會に此上なき名譽と得たるは西鶴の右に出るものなき程なり西鶴一代の著述數へ來ればなほ多あり中此著の如きは其の一代男、二代男、三代男、一代女、なんど共に一世と譽破したるもの如くゆ原本猥褻の個所は翻刻者の注意もて之と削除し代ふに〇と以てしたるの注意至れといふべし此書紙質と擇び活字も鮮明にて一部の正價十二錢なり

「東京新報」 近松門左工門の著作全書と出版したる武藏屋と丸善書店に於て今度發賣したる故西鶴の好色五人女は此節元祿文學の流行に連れ其價も騰貴して古本ならば一部二三圓上にも上るべき珍本と僅十二錢にて一般讀者に頒つものなり







912.4

Ti238s7

心中天の網島

国立国会図書館

088259-000-3

912.4-Ti238s7

心中天の網島・心中宵庚申

近松 門左衛門/著

M24

DBI-0089



